

総合科学入門講座

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/shin-kokusai/scienceandhumanity/top.html>

2017年5月19日

授業に対する学生のコメントと教員による応答

★以下のコメントは、提出した順になっています（一番下がいちばん先に提出されたもの）。

まず、今回の講義の要約は、総合科学入門講座では、根拠に基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し合意を形成する能力、「政治リテラシー」の獲得を目標としている。「政治リテラシー」とは、政治に対する関心、知識、行動力のことだ。「政治リテラシー」があれば、危機を敏感に知り、果敢に行動するという対応ができる。

戦争の被害と災害の被害を一緒くたにとらえると、加害の主体は何か、それへの対策は何かを見失う。天災ならやむをえず、大自然の前に無力な人間という謙虚さを認識するしかない。しかし、人災は人間が招いたことであり避けようがある。

複数の人がいると利害がぶつかるので、社会における利害の調整・解決として政治がある。政府が政治を行うが、国家権力の強大さと国家権力の濫用可能性について考え、強大国家権力性悪観を前提にしなければならない。

民主主義によって、悪い政府は変えることができ、選挙で平和的に政権交代できる。そのためには、賢明な有権者、報道の自由・知る権利が必須だが、低投票率やメディアの衰退、知る権利を奪う秘密保護法や共謀罪などで危機に陥っている。また、政府や国家の行動を縛る規制・ルールである憲法が、安保法制で軽視されている。憲法は国民が政府を縛るものだが、自民党改憲案では、憲法は政府でなく国民を規制している。

そして、今回の講義を終えての意見は、学生は政治に対する関心を持ち、知識を身につけ、行動するという「政治リテラシー」を獲得しなければならない。その理由は、無能、邪悪な人間が国家権力を行使する可能性があり、戦争や虐殺が繰り返されてしまうからだ。日本の現状を認識し行動することで、「ゆでガエル」にならないようにしたい。

今回の授業では民主主義と立憲主義、政治リテラシーについて学んだ。

私は普段から新聞を読み政治に興味を持つよう努力しているのだが、最初に挙げられた画像に違和感を覚えることができなかった。今後は新聞だけでなく他のメディアからも情報を手に入れ、政治リテラシーを高めていきたいと考えているのだが、どのような手段が

望ましいだろうか?また **オススメの書籍**などはあれば紹介してほしい。

コメント [U1]: たとえば矢部宏治『日本はなぜ、「戦争ができる国」になったのか』集英社インターナショナル、2016年; 同『日本はなぜ、「基地」と「原発」を止められないのか』同、2014年。

政治とは、複数の人が集まった時に起こる利害関係を解決するために行われるものである。そして、政治を行うのは政府であり、信頼できない政府を変えるために民主主義という考え方が存在する。民主主義における重要な観点が政治リテラシーであり、今日において政治リテラシーの考えを持っている人は少ない。政治リテラシーとは政治に対する関心、知識、行動力のことであり、身に着けることで今日の日本が抱える問題について考えることができるようになる。

今日の授業の重要な点は、政治について興味を持つ必要がある、という点だ。

授業で言ったように、大学で学生同士が政治について話をしているところを見たことがなく、自分も友達と話したことはなかった。選挙権が18歳以上の人に与えられるようになった現在、若者が政治についての知識を身につける必要がある。現在、民主主義であり、政治をする人物を選ぶのは私たちである。よりよい政治が行われるよう、また自分自身が政治情勢を理解し正しい判断ができるように日ごろから政治に関心を持つことが必要だ。

今回の授業では、政治への関心の重要性がとても意識させられた。

戦争の被害に遭われた人達のことを知って、「残酷だ」とか「ひどい...」などと言うことができる人は多くいるが、戦争の被害をみて、その被害の背景にある問題を考え、どんな部分が問題で、問題の原因はどこにあって、その原因を除くことはできなかったのか。といったことまで考えるべきだということがわかった。

そして、その考えるべき問題を見つけるきっかけになるものが政治への関心であり、政治への関心が危機回避につながるので、「政治のことはよくわからないから、投票にはいかない」という発想は甘い考えであることがわかった。

今回の総合科学部入門講座では、政治リテラシーの獲得の重要性について ~~を~~学んだ。政治リテラシーとは、政治に対する関心・知識・行動力のことである。政治は、世界に人間が複数人存在している限り必要なものだ。私たちは必ず利害の衝突を起こしてしまうからである。既に私たちは、自国の政治について何も知らないで受身だけの姿勢でいい年齢ではない。危機を知り、果敢に行動できるかがひどい被害を受けることを避けるために重要となる。授業では、民主主義が働いていなく国家が加害者となって国家権力がもたらした人災の映像を見た。砂漠で結婚式をしていた民族が爆弾の攻撃を受けた後の映像だった。

双方の主張はどちらが間違い、どちらが正しいとその場で即判断できるものではなかった。しかし家族の遺体にすがりつき泣いている人が、救助の人に剥がされている姿はととも見えていられるものではない。ここでやはり、政府の独裁的な行動は縛られるべきだということがわかる。市民がひどい被害を受け、沢山の尊い命を政府に奪われることがないように民主主義と立憲主義の仕組みを確立し、維持していくべきなのである。

今回の授業は民主主義と政治リテラシーについてだった。政治リテラシーとは政治に対する関心、知識、行動力のことである。そしてこの力を得るために必要なのは、国家は強大であり、暴走して国民に危害を与える存在になりうる可能性があることを認識し、それを踏まえた視点を持つことが必要である。また、憲法は国民ではなく国家を縛るために存在しているが、安倍政権は逆に憲法で国民を縛ろうとしている。

現在安倍政権は、従来の憲法解釈から外れ、政府にとって都合のいいものへと変えており、本来縛られているはずの政府が縄をほどきかけている状態にある。しかしこのまま政府の自由度が際限なく上がってしまうと、本当に民主主義ではなく、独裁政権になってしまう可能性がある。もちろん断言はできないが可能性は否定できない。そこでやはり重要になってくるのは選挙である。国会などに参加し直接意見を言うことができれば話は早いですが、議員にでもならない限りそれは難しい。しかしだからと言ってなにもしなければ、それこそ政府はやりたい放題である。18歳まで選挙権が引き下げられ、より多くの人が自分の意思を表明できるようになった。しかし、実際はどの党に入ればいいのかかわからず、とりあえず有名な党に入れたという人や、そもそも選挙に行っていないという人も多数といった状況だ。最近ではメディアも一つの視点からしか情報を流さなかったり、委縮してしまって自由な情報発信ができなかったりと、国民が知れる情報が少なくなってしまう、理解し自分の中に落とし込むまで行きつかない人が増えているのも、こうした現状の理由の一つではないだろうか。まずは選挙に行くことが大切だが、行く前のある程度それぞれの党について知ったうえで、なぜ自分がその党に投票するのか自分なりの理由をもって選挙に行くべきである。

これを一人一人が意識することで、授業にもあった「ゆでガエル」にならないための危機をいかに敏感に知り、いかに果敢に行動できるか、ということにもつながるのではないだろうか。

今回の授業では、餐場先生による民主主義についての講義を受けた。

私たちには今、政治リテラシーを身に付けることが求められている。

たとえば、私たちが普段友達と食事をしながら政治が話題にあがることはない。また、政治や宗教には関わらないほうが無難だといったような考え方を、知らず知らずのうちに

コメント [a2]: それでも、投票率を上げる意味はありますが…。

持ってしまっている。

しかし、このままでは政治リテラシーを身に付けることはできない。ではなぜ、政治リテラシーを身に付けることが重要視されているのか。それは、国家権力が強大であり、過去の歴史からもわかるように、国家権力が濫用される可能性が常にありうるからである。

それゆえ、私たち国民が政治リテラシーを身に付けることが大切なのである。日本が民主主義国家である以上、選挙をつかって平和かつ容易に政権交代がおこなえる。私たち国民によって、悪い政府は変えることができるのだ。また最近では、憲法が政府に軽視される傾向にある。政府や国家の行動を縛る規制・ルールである唯一の憲法を私たち国民で守らなければならないのだ。

つまり、私たちが政治リテラシーを持つことで、社会を変えることができる。

今回の講義は、「政治リテラシー」の話だった。そこでポイントとなるのはその「政治リテラシー」を獲得することだ。そのためにはまずその意味を確認する必要がある。「政治に関する関心、知識、行動力」だ。その関心を深める上で、複数の人が存在するところで政治があるという定義を確認しておく。複数の人がいるため、利害がぶつかることは避けられない。そこで大切になるのは調整・解決である。その調整・解決を誤った例として国家権力の話があった。イラク戦争やドイツのユダヤ人虐殺をみてに国家権力の暴走の例を見ていった。それを防ぐ方法として効果的なものとして民主主義、憲法が挙げられる。だが、現在、この二つの方法のあり方も危機にさらされていることを忘れてはならない。さらに、国家が加害者となるのが最も酷い人災であることの認識も必要だ。

現在、世間で若者の選挙投票率が問題にされているが、その問題の背景にあるものが国家権力の暴走だと学んだ。それは最悪の場合であるが実際に今、安倍内閣の法律の変更がそのような言われ方をするのも一理あると感じた。

今回の授業では、改めて命の重さそして権力の怖さを思い知った。政治リテラシーとは、政治に関する関心、知識、行動力をさす。それを身に着けるためには、強大国家性悪観が必要である。また、健全な政治を行うためには価値の配分と権力が重要だ。ただ、権力が集中し乱用されると今回映像を見たイラク戦争のように罪なき多くの命が奪われる。国家が絡むと死者数は大幅に増え、町は壊滅的なものになり、多くの人が悲しむ。そうならないためにも賢明な有権者によって行われる民主主義を導入すること、また憲法を制定し政府の行動を縛ることが大切だ。

今回の授業で以下のことがわかった。一つ目は他者と対話することによって合意を形成

コメント [y3]: 指示対象不明。事実問題として、「若者の投票率の低下」の背景は、「国家権力の暴走」ではない。

コメント [y4]: 指示対象不明。戦争？

コメント [y5]: 指示対象不明。

コメント [y6]: 「感じる」を消して理由や根拠を書こう。

することは、民主主義にとって、非常に大切であること。二つ目は政治リテラシーを獲得することがこれからの生活に必要であるということ。三つ目は政治リテラシーとは、政治に対し関心、知識を持ち行動すること。さらに、政治リテラシーを持つのに、前提として持っておかなければならないものがあるということ。四つ目は前提として持っておくべきものは、強大国家権力性悪観であるということ。また、強大国家権力性悪観とは、国家権力とは強大であり、民主主義社会の仕組みによって無能な人間や邪悪な人間がその権力を持つ可能性が常にあるということ。五つ目は憲法とは強大な国家を縛るものであるということ。最後は国家による危機的状況を回避できるのは、政治リテラシーを持った市民であるということ。

憲法解釈の変更に関する部分の講義は、時間がなかったこともあって、駆け足状態で進んでしまっていたが、もう少し詳しく説明してほしい。なぜなら、憲法解釈が今まで一回も行われてこなかったかというそうではないし、かといって政府が憲法解釈の変更を行うのが許されているかというそうではない、という極めて難解な部分であるからだ。

今回の授業で、政治リテラシーがいかに重要かがわかった。

今回の講義は民主主義論であった。今後私たちが政治リテラシーを獲得できるかどうかのポイントである。

講義で、阪神淡路大震災と沖縄戦を同じ被害としている内容の記念碑の画像が出された。この時にどこか変だと感じた人は見たところ少なかった。これから政治リテラシーを獲得することは少し遅いのだろうか。恥ずかしながら、私は変だと感じた部分は、天災と人災を同じ被害とみていたのではなく、戦後 50 年の記念碑に阪神淡路大震災のことを書いていることが変だと感じていた。もう少し内容を見るべきであった。

今回の講義で、「個人が暴れても死者は 2 桁だが、国家が暴れば死者は 7~8 桁にまでのぼる」と先生が話されていたことが強く印象に残った。確かに、昨年、相模原市の障がい者施設を元職員が襲った事件では 19 人が亡くなったが、ナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺では約 600 万人が亡くなった。国家レベルになると死者数の桁が大きく大きくなり、個人と国家の違いの大きさが分かった。

今回の饗場先生の授業で印象に残ったのは「天災の人災ちがい」だ。

まず、政治リテラシーとはということから始まり、東日本大地震やイランでの事件など、現実に起きたことを話題にだし話を進めていった。その話を聞いていくうちに私は茹で上がったカエルになってしまっていると感じた。問題の核心の部分が見えていなかった。

石碑に書いてあった文を読んでも全く気づかず、答えを言われると衝撃を受けた。天災はどうしようもないものだが、人災の場合は絶対に加害者はいるわけで、防ぐことができ

コメント [U7]: イラク

コメント [y8]: そのことからのもう一つの帰結は、人災の場合は、被害者は加害者に報復したいと考えることです（相手が自然なら報復することはできない）。そうして、報復が報復を生み、人災は拡大します。

コメント [U9]: y さんの言う通りです。その「報復の連鎖」の問題は授業中に説明しそびれました。

るものだ。全く違う 2 つを同じようにみなし、扱うことは、より被害者を増やすことになる。

また、ドイツでの死亡者がたくさんいた目を背けたいくなる光景は今でも覚えている。「国家権力の威力」を知ることとなった。「国家権力はうまく行使すると多くの人を守ることができるものだが、ドイツのように悪人が行使することで国家権力は猛獣と化す。」そのような言葉は映像を見た後の私にはとても響いた。今の安倍政権は徐々に後者のようになっているのではないか。報道の自由や憲法改正など、思っている以上に日本は危険な状態に近づいているのかもしれない。

これから自分が危機的状況に気付けるか、この授業を通して学んだことをいかしたい。

今回の講義を受けて、初めて「政治」は私たちにとって重要なものであると認識するようになりました。現代はグローバル化が進み、世界中の人々と関わり合いながら生きていかなければならず、それぞれが社会で平和に暮らしていくためにも、善良な「政治」を行うことが必要不可欠です。しかし、不適切な思想をもつ人間が強大な国家権力を手に入れ、濫用してしまった場合、残虐な悲劇が起こってしまいます。イラク戦争の映像は本当に衝撃的で、目を背けたいくなりましたが、平和ボケしている私には、まだ現実味が湧かないところもあります。もっと世界の事実、現状を知り、自分たちはどうするべきなのか考えていかなければならないと感じました。

コメント [y10]: それも大切ですが、日本国内の問題に目を向けることも大切です。

今回の授業を受け、悲惨という物事には人の力でどうにかなる人為的なものとどうにもならない自然的なものがあるということ学んだ。では双方にはどのような違いがあるのか。それは自然的なものは悲劇が連鎖することはないが、人為的なものは復讐や悲しみの連鎖を生むという点である。人為的な場合には必ず相手方がいるので復讐という悲劇を生み出してしまうのだ。今回はその様子をドキュメンタリーという形で初めて見た。イラク戦争の様子と東日本大震災の様子でありともに悲惨だと感じたが、やはり戦争という避けることができたかもしれない事象で身内や知り合いを無くした残されたものたちの悲しみよりは筆舌尽くしがたいものがあった。他にもナチスドイツなど誤った指導者が権力を握ったことでこの世の地獄重思えるようなことが行われたことも知った。我々はこのようなことを忘れるべきではなく、一人一人が政治を学びこのようなことを二度と起こさぬように国民が抑止力となって政治の暴走を止めねばならないのだ。

コメント [y11]: そのとおりですね。

コメント [y12]: そのためには具体的に何をしなければいけないでしょうか。

今回は、政治リテラシーをつける必要性に気付かせる授業だった。

始め、天災と人災という二面から起きる悲劇というテーマに違和感を私は感じなかった。

その悲劇というのは決定的に異なるが、なぜ気付かなかったかの。それは、私たちが両者とも、必ず起きる悲劇だと仮定済みであり、どちらも仕方の無いものとして捉えているからである。

それ以上もそれ以下もない、と多くの人々が感じているのが今の現状であることに気付かされた。

しかし、天災の悲劇ならやむを得ず、人災の悲劇は決して無視してはならない。

私はこの授業を通して、日常生活において、様々な課題を見過ごしていることが多いと自覚した。

世の中に氾濫している情報から違和感を敏感に感じ取り、当事者意識を持って課題解決のために考えることが大切である。そのための政治リテラシーを身につけるべく、まずは多種多様な課題に、批判的姿勢を保ちつつ取り組むことの積み重ねが一番重要であると思った。

前回の授業には猟奇性を感じた。残虐性のある映像に対するものでなく、配慮のなさに対するものである。先生は映像を用いることにより大部分の学生に強いインパクトを与え、危機意識を引き出したかもしれない。ただ、学生全員がそうだったのだろうか。中には涙を流し、ただ単に嫌な思いをした学生もいたのではないか。確かに映像には事実をありのまま映し出し、見るものにインパクトを残す強大な力がある。だが同時に与える印象が大きくなりすぎるのも事実であるはずだ。多くの学生は、映像を見ることによって、その後の授業展開についていきやすくなったかもしれない。だが、一部には、頭からショッキングな映像が離れず、授業がままならなくなってしまったが~~くせい~~学生もいたのではないか。私は、あのような映像が苦手、またはそれに関して免疫のない学生のためにも、現実だから目をそらすなどという異常な発言はやめてほしかった。現実を痛感することと、残虐な映像を見ることは全くの別物である。せめてあのような映像を使用することは授業の前に告知してほしいし、見ないという選択肢を学生に与えてほしかった。

今回の講義では先週の返答、そして政治リテラシーなどについて学んだ。

私の個人的な考えだが今の日本の政治体制は根本から変えていく必要があると考えている。何故かと言うと政治に文句を言う人間ばかりで投票は全くしないような人が多い。ならば政治を行う側は文句を言わさないように満足するような政治を行うか、意見を反映させるために行っている選挙にもっと投票させられるようにならなければならない。安倍内閣の憲法改正も私には特に意味がわからない。改正した理由を納得できるように教えてもらいたいものだ。憲法の改正の他にもっとやるべきことがあるはずだ。

共謀とは特定の犯罪行為を実行しようという具体的・現実的な合意のことである(考える

コメント [y13]: 再三、告知していましたよ。それから、他の学生のコメントを読む限り、多くの学生は映像のメッセージをきちんと受け止めているように思われます。

時間 「共謀罪とは何が罪になり、誰が対象になるのかを調べたまとめ」 2017-01-09
<http://www.kangaerujikan.com/entry/2017/01/09/184950>

つまり犯罪を計画した段階で罪にして処分してしまおう、ということにしようとしているのが共謀罪である

今回の授業で政治リテラシーの重要性を知りました。今までは先生がお話しされたように政治と宗教には関わらないほうが無難と思っていた側の人間でしたが天災ではない人災で苦しむ人々を動画で見て気持ちが変わりました。昨年 18 歳で選挙に参加することができた制度が変わったとき私はまだ 17 歳で選挙権がなくもしあったとしても行かないつもりでいました。しかし強大国家権力性悪観の考えに基づき選挙に行ったり政治を知ろうとしたりなどして自ら行動に移すことの大切さを知ったのでしっかりと実行したいと思います。

今日の講義で、民主主義について、政治リテラシーや天災・人災、日本の憲法の問題点という観点から学んだ。

「ゆでガエル」の例は、わかりやすい例だった。危機だとわかればすぐに対処しようとするが、徐々に危機になっていくのは気づきづらいので、それに素早く気づき、行動することが大切だということだった。天災は避けられないが、戦争などの人災は必ず加害者がいるので、避けることができる。だが、この「人災」によって、今でも世界中の多くの人々が苦しめられている。ビデオで見たような衝撃的な事実が存在するが、これらは「仕方ない」で済まされる問題ではない。国家単位で政治が不適切に行使されると、被害者の数は私たちでは想像できないほど多い。

だが、この話は日本も関係がないわけではない。国民を守るための民主主義や憲法が変わってきていて、危機的な状況になってきているので、外国で起こっていることを遠い世界のことのように俯瞰してはならない。いつまでもこれらの問題に目を背けず、現実と向き合っていくことが大切だ。私たちの力で変えることのできる問題ではないが、積極的に知ろうとすることで、問題の本質を知ることができるのである。

今回の講義では「民主主義」について学んだ。天災・人災は全く違うもので、一緒にしてはいけない。天災は防ぐことができないが、人災は防ぐことができる。

映像や画像がとても印象手だった。テレビやニュースではあまり見ることができない映像や画像だった。特にイラクの戦争の映像は衝撃を受けた。国家や政府は簡単に 7・8 桁の人数の人を殺すことができる。今までは、政治についてあまり興味がなかったし、選挙で誰が選ばれるのかにも興味はなかった。投票率も 20 代が一番少なく、右肩下がりだ。今日

コメント [y14]: 制作者はどういう人物ですか?信頼できる情報源でしょうか?それから、調べるときには、複数の情報源を参照しましょう。

コメント [y15]: 傍観

コメント [y16]: 民主主義国家では、私たちの力で変えることができます。

の講義を聞き、選挙には積極的に参加するべきだと考えた。国家権力の強大さ、国家権力の乱用可能性を感じたからだ。

今回の講義はすごく重く考えさせられるものだった。それと同時に難しい話だった。しかし、決して関係のない話とは思えない。

コメント [y17]: 具体的に何を考えたのか書きましょう。

今回の講義は民主主義とは何か、というテーマだった。講義の冒頭に沖縄にある碑の文章をみて何か違和感に感じるところはないか、という質問を投げかけられた。正直何もわからなかった。「政治」「民主主義」、また堅い話が展開されるのかなと思った。だがすぐにそんなことはないと思う。衝撃的な映像とともに進んでいく講義。これまで戦争や震災を民主主義をテーマにした話など聞いたこともなかった。もちろんしたこともない。

今回の授業は、立憲民主主義-政治リテラシーの必要性という題で、過去の映像や画像を利用してわかりやすく現代社会の課題を教えてくれた。

正直、ユダヤ人虐殺の映像は衝撃的なものばかりで目を塞いでしまった時もあった。しかし、これも負の遺産と呼ばれた歴史であるので、深く受け入れ、そこから現状を見直し、改善していかなければいけない。もっとも、現ドイツは、その歴史の反省から、移民・難民問題では寛容な姿勢を見せてきたのだ。しかし、今は、移民・難民を受け入れるのには反対する人が多くなっていて、また排外する姿勢に逆戻りしているのではないかと懸念される。日本であっても、世界大戦時の反省から憲法第9条がある。安倍内閣は、その憲法9条を改正すると言っている。昔の歴史は、いい参考書として活用することで、未来は変えられるのだ。

そのことを意識してニュースを見ていくと、私たちの政治リテラシーが変わり、ふとした時に、友達と意見を言い合っているに違いない。

今回の授業は、民主主義論についてであった。民主主義の仕組みにおいて不可欠のプロセスでもあり、総合科学入門講座の目標の一つである根拠に基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し合意を形成する能力について学んだ。危機を敏感に知り、果敢に行動できるかが政治リテラシーの獲得に関わってくる。沖縄にある記念碑の碑文を見ても私は何も引っかけなかった。つまり、政治リテラシーがないということだ。次にシリアやイラクにおける戦争の被害の映像を見たがとても悲惨なものであった。その後に東日本大震災の被害の映像を見たが、そちらも悲惨であった。しかし、そこには天災か人災かの違いがあった。沖縄にある碑文は戦争や災害による悲劇を一緒にしている。一緒にしていることによって加害の主体は何か、それへの対策は何かを見失っているのである。天災ならやむを得

ないが人災なら避けることが可能である。人災から避けるには民主主義と立憲主義の仕組みの**確立・維持**すればよい。

今回の総合科学入門講座では、シリアやイラクにおける戦争被害や、東日本大震災を含め様々な震災被害の映像を見た。この映像で、国家権力の強大さと国家権力の濫用可能性が存在することが分かった。悪い政府を変えるためには、民主主義であることや、報道の自由と知る権利が必須である。政府の行動を縛る憲法を制定し、立憲主義である必要があった。また、**集団的自由権**について、これまでの政府と安倍内閣の憲法解釈の違いを学んだ。最もひどい人災とは、個人の働きではなく、国家が加害者となり国家権力によってもたらされる人災であることを理解した。現在の日本は世界的に見て、食料に恵まれていて、生活保護や公的給付を受けることができるため、**餓死することが大方無い**。しかし、映像で見た戦争で亡くなった人々の痩せこけたあまりにも無残な姿に衝撃を受けた。

今回の授業では、民主主義ということで世界や日本の天災や人災についてのお話だった。一番最初に言われた「ゆでガエルにならないために」ということが一番印象に残っている。日本の治安の良さや、今やもうあまり報道されていない東日本大震災の被害だったり、当たり前になり思い込みで自分とは関係ないと思って生活してしまうとゆでガエルになってしまう。そうならないためにも今回学んだ、「政治リテラシー」を身につけることが必要である。沖縄の石碑を見て、天災と人災とを同じように書かれていることにはすぐに気がついた。人災での被害は本当に計り知れないほど無残なものである。ビデオを見ていると目をそらしたくなるほど辛い場面が多くあったが、私たちはその現実を目をそらしてはならない。確かに、あの映像をテレビで放送することは残酷すぎるかもしれないがもう少し放送してもいいのではないかな。正直、あまりにも衝撃的な現場を実際に見るのは今回の授業が初めてだった。あの映像を見て自分とは関係ないと思っていた自分がバカらしく感じたし、また**何か世界のために何かできることをしたいとも思った**。実際に映像を見て知らないことを知ること意識は変わるのだ。あの映像と同じことを繰り返さないためにも、小さなことから行動する優しさと勇気を忘れてはならない。小さな行動とは、若者が積極的に選挙に行くこと。そして、多くの知識を身につけ政府が行うことに対して反対なら反対の声を上げることである。そのためには、様々な知識を蓄えることが必要である。大学生活4年間の間に多くのことを学びたい。

今回の講義は政治に関心を向けた内容の講義をしていただいた。今の日本人、特に私たち若者は、政治への関心を持ち、政治に関する知識を備え、有事の際には政治について考

コメント [y18]: ナチスが民主的手続きによって独裁権を獲得したように、民主主義は壊れやすいものです。維持するためには不断的な努力が必要です。

コメント [U19]: 集団的自衛権です。

コメント [y20]: 日本でも最近はときどき餓死者が見られます。

コメント [U21]: 後期の教養教育の授業で「国際協力論—この貧困と紛争の絶えない世界で」がありますので、そこでも学んでください。

え意見する行動力を身に付けること、つまり政治リテラシーを身につけることが大事である。その政治リテラシーを身につける上で大事なことは、強大国家権力性悪観を前提に認識を置くことである。強大国家権力性悪観とは、国家権力は力が強大で、その権力を行使する人間によっては悪の方に力を使われてしまう可能性があるという認識だ。強大国家性悪観を持って政治リテラシーを獲得し、日本の政治にもっと関心を持って、政府が悪の道に走らないか見守り、意見して、日本で人災が起こらないようにすべきである。

1. 授業内容

立憲民主主義、政治リテラシーの必要性について

政治リテラシーとは、政治に対する関心、知識、行動力のことである。

そもそも政治とは、地球に複数の人間が存在し、利害の衝突が起こるために存在している。

また、民主主義とは、悪い政治を変えることであり、日本のように選挙で平和的に、また、容易に政権交代ができる。

そして憲法とは、政府の行動を縛ることである。政府は国家権力であり、猛獣にたとえられる。縛りとは憲法であり、檻にたとえられる。猛獣である政府を好き勝手にさせないために憲法があるといえる。

「政治リテラシー」の獲得に必要な前提の認識とは、強大国家権力性悪観である。

また、最もひどい人災は、国家が加害者となり、国家権力によってもたらされる。市民にとって最もいいことは、民主主義と立憲主義の仕組みを確立・維持していくことである。

2. 意見、感想

今回、あまりにもひどい人災の映像を見て、やはり人間の武力行為による災害はあるべきではないと改めて感じた。

よって、現在の北朝鮮によるミサイル攻撃の問題も人ごとではなく、真剣に考えていかなければならないと思った。

コメント [y22]: 具体的にどのようなことを考えるのですか？

今回は「民主主義論」という題目で政治リテラシーの必要性について講義してくださいました。「政治リテラシー」とは政治に対する関心、知識、行動力のことで、民主主義において基本の観点であり、前提の認識として「強大国家権力性悪観」を持つ必要がある。強大な国家の権力が無能で邪悪な人間によって濫用されることで人災が起きてしまうという事態を避けるために、悪い政府を比較的容易に変えてしまうことができる「民主主義」と、政府の行動を憲法で縛る「立憲主義」は非常に大切であるが、そのどちらも今の日本では蔑ろにされつつある。しかし、現状日本では政治について興味を持っていない若者が多く、このままではゆでガエル状態になってしまう。そうならないために、危機により早く反応

し思い切った行動を取ることが重要なのだが、そうするには政治リテラシーを身につける必要がある。

このような授業の内容を聞いて、政治に関心を持つことの重要性を改めて理解できた。今までは「政府に対して何か行動を起こしたいほど生活に不満があるわけでもないし、自分一人が意見を言ってもどうにもならない」と思っていた。しかし、自分一人の生活どころではなく国自体が危険な状態に陥っているということを知り、国民一人一人が政府を監視し、今の国家について考えを持ち、行動するという役割を果たすことがどれほど大事なことであるかというのを再認識させられた。大学に入ったらニュースを見る習慣をつけようと思いつつ、それをしないまま1か月半ほど過ごしてきたが、これを機に時間をつくってニュースを見るようにしたい。本も積極的に読んで、テレビで見た内容をより消化できるようにしていきたい。

今回の講義では政治について学んだ。講義の中で、1番印象に残っているのは、現代の世界には人災で亡くなっている方が多くいるという内容である。それらを表す動画を見た時に、言葉にならなかった。人災というのは、本来ならば回避可能である災いである。なぜなら、そこには国同士の政治的対立、宗教の違いなど、国家の勝手な政治、個人の利己的な考えが含まれているからである。しかしながら、このことは他人事ではない。日本にいる我々も常に人災にさらされる危険性があることを肝に銘じて生きていかなければならない。人災少しでも防ぐために、選挙権を持つ年齢になったら、必ず選挙に行き、自国の政治に興味を持つことが、今私にできる身近なことの1つであると考えさせられた。

今回の講義では、民主主義について学んだ。

ナチスのユダヤ人虐殺に関する動画から二つのことが分かる。一つ目は、国家権力の強大さである。

個人が暴れてもせいぜい死者は2桁であるが、国家規模になると死者は7、8桁にまで達する。そして二つ目は、国家権力の濫用可能性である。つまり、邪悪で無能な人間が国家権力を行使する場合が常にありうるということである。

この二つに対してどのように対処するかということについても学んだ。一つ目は、悪い政府は変えるということである。民主主義国家では、選挙によって平和的に容易に政権交代できる。そのためには、件名な有権者や報道の自由、知る権利が必須であるが、近年では特に若者世代で顕著である低投票率や、メディアの衰退、そして知る権利を奪うこととなる秘密保護法が問題となっている。二つ目は、憲法によって政府の行動を縛るということである。憲法は政府や国家の行動を縛る規制、ルールのことである。しかし、政府は安保法制で憲法、立憲主義を軽視しており、また政府ではなく国民を規制する自民党改憲案

も問題となっている。

生協で食事をしながら政治が話題にあがるかという質問があったが、思い返せば私は食事の時間に限らず友人と政治の話をもとどしたことがない。そもそも、政治についての知識も興味も少ない。政治を身近なものとして捉えることができず、当事者意識がまるでない。ここで、だから身近に感じることができるよう誰かが何とかしろとふんぞり返るのか、知識をつけるためにまずは政治に関する本を読んでみようとするのかどうかは大きな違いである。誰かが自分のために何かしてくれるまでは自分では動かないというスタンスでいることは、一見現状を変えるために能動的に行動しているように見えるが、自分が行動するかどうかを他人任せにしている。民主主義であるということは各々が責任をもっているということなので、その責任感を忘れず、社会の一員として自主的に本を読んだり新聞を読んだりすることで政治に関する知識を身に付けたい。

今回は饗場先生による民主主義に関する講義だった。

中でも中東の惨状や世界大戦時の収容所の映像は生々しく、国家権力が暴走した時の恐ろしさをとても強調していた。また、市民の力によって政府(国家権力)を変える民主主義と政府を縛る立憲主義の大切さを再確認することが大切だと改めて認識した。

私は今まであまり国家権力に危機感を持ったことがなく、**経済政策の成功からむしろいい政権だと思っていた**。だが、講義を受け、改めて批判的に今の政権を見ると、権力が自らを縛るものを壊そうとしているのがよくわかった。

権力の暴走を防ぐためには当然、国民の政治への関心が必要不可欠だが、私は日本が政治に関心を持つ市民が少ない国だと考える。なぜなら日本はフランスやアメリカのように市民が望んで政治に関わろうとすることをせず、普通選挙も大戦後に諸外国の流れに乗って採用した歴史があり、加えて日本人の大部分が「自分がしなくても誰かがするだろう」という考えを持っているからである。

すぐに国民全員に政治リテラシーを持つということは不可能であるが、私は今回の講義をきっかけに政治への関心を深め、国家権力の暴走にいち早く声をあげられる人になりたい。

今回の総合科学入門講座は民主主義についての講義であった。「人災と天災を混同してはいけない」という事と「憲法は簡単に変えて良いものではない」という事についてはその通りであるし異論はない。しかし、**講義全体を通して考えると憲法改正に対する批判や共謀罪(テロ等準備罪)に対する批判、と民主主義論というよりは安倍政権への批判ととれるような講義であった**。日本国憲法 19 条によって思想の自由は保障されているが、教育基本法 14 条では特定の政党への反対をするための政治教育は禁止されている。1 人の人間とし

コメント [U23]: アベノミクスのことですか？確かに大企業や輸出産業には良い政策ですが、ふつうの市民や地方の経済には恩恵が乏しいですね。大学生の就職率は数字はいいですが、非正規雇用、ブラック企業、過労死などが表面化しています。

て特定の政党を批判する権利は当然の権利であり、講演会等を行う分には問題はないだろうが、大学の講義でそれを行ってしまうのはいかなものだろうか。

今回の講義では、安保法制、特定秘密保護法、テロ等準備罪、自民党改憲案に反対の立場からの一方的な主張であると感じた。

【質問】

1. 一方の立場からの政治教育は教育基本法第 14 条 2 に抵触するのではないか。
2. 批判するための論理的な根拠。
3. 自衛隊は合憲であると考えているのか。
4. 本当に個別的自衛権のみで戦争を回避し、他国からの侵略から守れるのか。

【質問の理由】

1. 賛成意見を提示しない批判的な意見のみであった。また、反対集会への参加呼びかけとチラシ配りは問題ないのか。一年次の必修科目で行われたことに加え、テロ等準備罪反対が大学としての主張という認識でよいのか。
2. 詳細を教えることなく、ただ主観的な主張を述べているだけではないかと考えたため。例えば、自民党改憲案がどのように国民の権利を制限するのかについての説明がなかった。必ずしも賛成というわけではないが、詳しい説明を求める。
3. 集団的自衛権の行使容認が行えたように、政権の解釈次第で活動を拡大させることや縮小させることが可能な憲法自体に抜け穴があるのではないか。私としては、自衛隊とその活動範囲を憲法に追記し、縛るべきであると考えます。
4. 集団的自衛権は国連憲章第 51 条「国際連合加盟国に対して武力攻撃が発生した場合には、安全保障理事会が国際の平和及び安全の維持に必要な措置をとるまでの間、個別的又は集団的自衛の固有の権利を害するものではない。」にもあるように加盟国すべてに認められている権利である。そして、安全保障理事会による侵略国への制裁が科せられるまでには時間がかかる可能性があることも考えると、複数の国によって対抗する集団的自衛権は抑止力になり、平和な状態を作り出せるのではないか。

民主主義国家である日本の未来は国民 1 人 1 人によって決められる。間接選挙で国民の中から代表を選び、自分たちのかわりに議会などで政治活動をしてもらう。自分たちも代表者を選んでいるから間接的に政治に参加している。しかし、選挙では投票率が低く国民の真意を十分に反映できてない。特に若者の投票率は低く、投票しない若者よりも投票してくれる年寄りを重視した政治をしていこうとなる。こうすると若者にとっては不利なことが多くなってしまふ。ただ、若者の投票率を高める努力もするべきである。ネット投票はそういう意味で効果的なように思える。なぜなら、インターネットの発達により、どこ

コメント [a24]: 一部授業中に説明しますが、時間が足りないので、「国際政治学入門」を聴くか、研究室に来てください。

でも簡単に投票できるからである。投票というのは自分たちの意思表示であり、今後の政治に多く関わってくる。だから投票し、意思表示すべきである。

本講義は民主主義についてだった。日本は民主主義国家である。しかし、今の与党である自民党は民主主義に背く行動をしている。安保法案の可決を見ただけで一目瞭然である。あの法案に対し、世論調査では国民の過半数が反対していた。また、それを示そうと野党が連日、与党と議論。国民が大規模なデモ活動。そういった中での強行採決であった。あれは完全に民主主義ではない。与党が何を考えているか全く読み取れない所ではあるが、野党もこんな自由にさせてはいけぬ。しかし、野党にはそれだけの力はないのである。そこで、私達が選挙に行き、1人1人行動で示していくべきである。若者が行動に示すことで未来を考えたマニフェストを掲げた党が出てくるに違いない。そういう面で、私達も政治に関心を持つ必要があるのだ。

今回の映像では個人が暴れ出すと死者は2桁であるが、国家が暴れ出すと死者は7.8桁になるということから国家権力の強大さがわかり、無能や邪悪な人間が国家権力を行使する場合は常にあり得ることから国家権力の乱用可能性があるということごわかる。これらのことから神様に政治をお願いできない以上、今回の映像を前提で捉えることしかできないという強大国家権力性悪観が生まれてくる。また、民主主義を行うためには懸命な有権者、報道の自由、知る権利が必要になってくる。しかし現在は危機に面しており、投票率が低下したり、知る権利を奪う秘密保護法ができたりしている。そして政府の行動を縛る憲法の存在がある。政府や国家の行動を縛る規制、ルールであるが憲法がある仕組みを立憲主義というが、これも危機に面しており、政府は安保法制で憲法を軽視している。

いくつか映像を見たが、地震で被災した人々の映像と戦争で傷ついた人々の映像の違いとして、人災か天災であるということに心を打たれた。

日本を含め多くの国は民主主義である。これは先代の人々の努力により出来上がったものである。我々国民が意見を出しそれを代表者である政治家がまとめて実行し、適切なものでない場合我々はそれに抵抗する権利も持っている。しかし、政治に無関心であれば民主主義は何の意味も持たない。近頃若者の投票率の低さが問題となっている。それにより政治家は投票してくれる中高年向けの政策を作り、また若者は自分には関係ないと投票に行かない。この負の循環を止めなければならないのだが具体的な方法は全く浮かばない。ヒトラーの話をされていヒトラーが悪いことをした人、独裁者などは誰もが知っている。しかし、**そのヒトラーを政権者として選んだという事実**があるということを知っておかな

ければならない。我々の未来を担う人物を適切な判断のもと選択するためにもニュースやスマホなどで情報を収集することを心がけて時代に取り残されないようにしていく必要がある。

今回は民主主義について学んだ。二つのビデオを見て衝撃が走ったが、人災と天災ではこうも見方が違うのか、と改めて感じた。確かに饗場先生の言う通り最近の安倍政権はどこか行き過ぎている気がする。安保法制や特定秘密保護法などがその例だ。しかし、この少し行き過ぎた政策に対して疑問や怒りの声が届いていないとは言えない、ただし少数派なのだ。投票率にもちゃんとした数字が出ているように、**若者特に20代の人間が投票所に行かなさすぎる。そのため今現在与党自民党を救っている、すなわち一番の貢献者である高齢者が満足するような政策を中心に展開している。**それで若者に対して不利益を被っていたとしても、若者たち全員、もしくは多数が投票所に行って自分達が信頼できる政治家や党に一票を投じることで少しぐらいは今現在の状況は少しでも変わるのではないかと？そうすることによって今まで高齢者中心に政策を展開してきた自民党も若者の投票数が増えることによって、若者に対しての政策を無視できなくなるのではないかと。日本はありがたいことに民主国家であるから国民の民意に沿う形で政治は進んでいくということが保証されている。それを最大限に利用して老若男女関係なく国民全体で政治に興味を持てば、この現在の状況を転換できるのではないかと感じている。

今回の授業はとても衝撃的だった。私は授業ではじめに沖縄の碑文を読んだ時、戦争と天災をひと括りにしているのはおかしいということには気付いていた。しかし、なんとなくはわかっていたが具体的に表すのは難しかった。私は中東とアメリカの戦争やアウシュビッツ収容所や震災の映像を観て、その違いがはっきりわかった。しかし、死体の映像はショッキングで私の精神的にはたえ難いものだった。見なくてはいけないといけないものだと思うが、そういう系が苦手な私にとってはとても恐怖心が芽生えさせられるものだった。しかし、私は友達に寄っていきながらも映像を目をそらさずに観た。映像をみる前に本当に苦手な人は観なくてもいいということにして頂き、伝えていただきたい。

今回の総合科学入門講座は、民主主義に関してであった。最初に「政治と宗教には関わらないほうが無難」と思いますかという質問があったが、関わらないほうが無難ということでもないと言える。理由としては、政治に関しては直接民主制ではないが、我々が選挙立候補者に一票を投じ、その結果によってこれからの社会が決まっていく。その中で自分たちは選挙権を持っている有権者であることを自覚し、積極的に政治に参加していくべき

であるからである。さらに、宗教に関しては、オウム真理教の地下鉄サリン事件などによって敬遠しがちではあるが、一つひとつ宗教団体の理念や目標を知っているわけでもないにもかかわらず、他の宗教団体を「危ない集団」というように簡単にカテゴライズするのは思考停止しており、まずは調べる事や知る事から始めて理解する事が大事であると言えるからである。そうでなければ、我々市民が無差別に宗教団体を迫害しかねない。結果が良くなくとも知る事が重要である。さらに、政治リテラシーというキーワードをもとに現在の日本の危機としてメディアの衰退ということが取り上げられていた。「国境なき記者団」による報道の自由度世界 72 位と説明をしていたが、「フリーダム・ハウス」による報道の自由度は世界 44 位という値を出しており「自由」であると示している。統計を取る団体によって基準は変わるためもう少し情報が必要であり、授業での説明は偏りがあると言える。私も自民党改憲案を拝見させていただいたが、国民に対する規制も所々盛り込まれていた。憲法とは何かということを我々自身も学んでいく必要があり、反対するべきところは反対するべきである。最後に質問です。5/19 に開催された共謀罪の講演会に行かせていただきました。その講演会では共謀罪の恐ろしさについて、最後には共謀罪反対の旨の弁を述べられており、参加者に意見を聞くと反対派がほとんどでした。反対派が同じ反対派に向けて反対の弁を述べることに意味があるのでしょうか。それならば賛成派と反対派で議論をし、もっと良い意見を作り出すことに時間を使う方が良いのではないのでしょうか。

日本の現状は必ずしも良いとは言えない。日本規模だけでなく世界規模でも見ていく必要がある。グローバル化が進む現代では情報がほとんどどこにいても手に入り、飛行技術が高度化し人は以前よりも簡単に、また低価格で世界を移動できるようになった。世界のどこかでは今も誰かが何かしらの原因によって亡くなっている。数えきれない数の情報が私達の身の回りに存在している現代では、以前よりも世界で起こった何らかの事件についてのインパクトに欠けるのではないか。情報源の一つとして主にテレビがあるが、ニュース番組で事件が報道された際に使用する映像は以前よりも規制されたものが多く、またこれも私達に与えるインパクトは乏しく実際にその場で居合わせた人のインパクトとはかけ離れている。総合科学入門の授業で見た映像は目をそらしたくなるほど悲惨で残酷なもので、生徒の心にその状況を突き付けてくるようなものであった。人災も天災も比べられないくらい悲惨であり、比べてはならないものであるのかもしれない。特に人災は本来避けられるものである。国のトップである国家権力による虐殺は計り知れないほどの死者をだした。もし、ドイツが民主主義を掲げていたらこのような事件は起こらなかったのだろうかという疑問を問いかけても答えは出ないが、現代の日本では民主主義を掲げていて悪い政府を変えることができ、また立憲主義により憲法は政府の行動を縛る事ができる。私たちが国家権力による被害にあわないためには、政治リテラシーを獲得し日本の現状の認識・行動をし、危機の回避をするほかない。

コメント [U25]: 授業中、私は「この 72 位という統計にはいくつか疑問も出されているが」と、一応ことわって話をしたつもりですが。確かにこのデータが絶対的ではありませんが、ここ数年急落している実態はデータが示すとおりでしょう。

コメント [U26]: 確かに多くの講演会などは反対派だけ、賛成派だけで開くケースが多く、それでは限界があります。賛成、反対どちら側にしても、そこに行く事でそれぞれ新しい情報を得るメリットはあるでしょう。実は、国会はまさに反対派、賛成派が議論をする場ですが、国会中継見てわかるとおり、基本的にかみ合った議論をしていません。およそ言論の府とは思えない低レベルのやり取りです。

コメント [U27]: いえ、当時のドイツは高度な民主主義体制であり、その中で、「民主的に」ヒトラーが出ました。

日本の民主主義は非常に危機的な状況にある。投票率は低く更に、投票に行くのはお年寄りが大半で若者の意見は民意として反映されにくい状況にある。政治家は選挙の票を獲得するため、お年寄りにそったマニフェストを掲げ政治活動をしている。しかし、これはよくない。お年寄りは保守的である可能性が高いため、新しいことをし難い。その最たる例が大阪都構想であると言える。大阪都構想は僅差で否決されたが、反対に票を入れたのは、殆どがお年寄りであった。反対に入れた理由も実に保守的な理由が多かった。これからの日本を担っていく我々若者はもっと政治に関心を持ち声を上げなくてはならない。集団的自衛権の時に声を上げていたシールズのようにもっとアグレッシブにいかなければ、日本はどんどん古臭い価値観に囚われた、化石のような国になってしまう。お年寄りから早く、主導を奪う必要がある。

また、政治に関しては、アメリカの属国になりつつある日本からの脱却、もしくは、完全に属国になるのかをはっきりすべきである。日本国憲法よりも、日米安保が重視されるというのは、可笑しい話である。そして、日本国憲法も作ったのはアメリカである。更に、作られたのは戦後である。そこから大きな変更はなされていない。戦後のGHQの占領下にあった時の憲法を今後も使っていくというのは無理がある。国際情勢は大きく変わっている。それに、対応した憲法の変更が必要なのではないだろうか。しかし、アメリカの顔色を伺う今の日本では、それを行う事は容易ではない。ましてや、共謀罪や秘密保護法の出現により、より一層政権をひっくり返し、**維新を起こす事**が難しくなったように感じる。国は確実に民衆を支配しようとし始めている。我々は現政権に従うのか、従わないのかを決断しなければならない状態にあると考える。

コメント [y28]: 民主主義国家では、選挙により政権を取り換えることができますから、暴力的な革命を起こす必要はないはずです。

ここ最近、民主主義をめぐる最も基本の観念である「政治リテラシー」の獲得の重要性が増している。日本には食事中に政治について話をする人は少ないし、政治と宗教には関わらない方が無難だと考える人は多い。そうならないようにするためにも、いかに危機を敏感に知り、果敢に行動出来るかが大事だ。

私は兵庫県知事が送った沖縄にある碑文を見て戦争と災害は同じなのだろうかと思っかけることが出来た。その後の授業で天災と人災の違いがあると知ることが出来た。人災は防ぎようがあるし、天災は人間の小ささを思い知る。

では、本当に人災は防ぐことが出来るのだろうか。人災イコール戦争と**すゑる**のならば、相手は武器を持っており、**話し合う**のは出来ないのではないか。どのようなやり方が正解かは分からないとは思うのだが、例えばどうやって人災を防ぐのか。私には思いつかないので今回疑問となった。

コメント [y29]: 戦争になる前に話し合うことが必要でしょう。

今回の講義では、「民主主義論」をテーマとした。

内容は「政治リテラシー」の必要性についてであった。「政治リテラシー」とは、政治に対する関心、知識、行動力のことである。「政治リテラシー」を獲得するために必要な前提は、巨大国家権力性悪観である。これは、国家権力の強大さや、国家権力の濫用可能性のことである。私たちはこのような国家を変えなければならない。なぜなら、国家という組織の規模の大きさゆえに犠牲となる人々が多くなるからだ。改善策として、投票への参加や憲法が挙げられる。しかし、どちらも危機を迎えている。低投票率、共謀罪が原因である。私が考えるこれらの改善策は、二つある。

一つ目は、投票期間の拡大だ。今現在、事前投票も行われている。しかし、一日の投票時間を長くすることにより、夜遅くまで働いている人たちの投票率を上げることができる。

二つ目は、メディアの政治に対する報道力の拡大である。今回の講義でもあったように、私たちは政治について知るきっかけとなるのが、テレビや新聞のニュースである。しかし、政治家たちが本当の事実を隠そうとし、メディアも報じない。そうすれば、私たちは知らない間に悪い人に政治をさせているかもしれない。このことを防ぐためにも、メディアには政治についてより深くまで報道してほしい。

今回の講義で、日本の危険なことについて今まで以上に理解することができた。まずは、自分が政治について理解し、本当に適切な投票できるようにする。

今回の総合科学入門講座では「民主主義論」という授業が行われた。この授業では、イラク戦争の被害についてのビデオ映像が流された。授業のスライドで「衝撃的な場面があります」とあって、最初私は、「食事の前に何てものを見せるんだろう、戦争で悲惨なことがあった、という趣旨の説明だけでもいいのに」と思ってしまった。しかし映像を見てからすぐに、私はなんてことを思ってしまったのだろう、と自分を恥じた。なぜなら私はこの映像を見て、初めて戦争に巻き込まれた死体や嘆き悲しむ家族の状態を知ったからである。この映像では、首を吹き飛ばされた少女や、子供の死体にすがりついてなく父親、そんな父親を死体から引き離そうとする人々の姿が映し出されていた。普段から戦争は悲惨だ、という話は何度も聞かされるが、ここまで悲惨なことだとは想像できなかつたし、想像してもいなかつた。この映像を見たことで私は戦争の起こす被害の大きさをはっきりと実感することができた。そしてこの映像を見たことは、普段ニュースでは見ることでできない現実を知る良い機会となった。

この授業では、安倍政権に対して批判的な意見が見られた。スライドでは、「政府の行動を縛る=憲法」とし、その憲法を変えようとする安倍首相を「立憲主義の否定」とした。

私もその意見について賛成である。なぜなら安倍首相は、国民の意思よりも自分の理想を優先しているからである。2017年5月3日の憲法記念日に安倍首相は、「第19回公開憲

法フォーラム」で憲法改正について述べたビデオメッセージを流した。そのメッセージの中で首相は、「憲法改正は、自民党の立党以来の党是です。自民党結党者の悲願であり、歴代の総裁が受け継いでまいりました」¹⁾(毎日新聞社のサイトによる)と発言し、憲法改正に意欲を見せている。憲法改正には反対派や慎重派も存在しているにも関わらず、政府は「自民党の立党以来の党是」として自分たちで政府の行動を縛るはずの憲法を改正しようとしている。このような姿勢は民主主義国家の首相が取るべき姿勢ではない。

また、このビデオメッセージには 2 つ問題がある。まず、憲法改正についてのメッセージを首相が最初に公開したのは、国民全体ではなく一部の国民だった、ということである。憲法改正は国民の生活に大きく関わることである。そのため首相が憲法改正に向けたメッセージというものは国民に広く知らされるものであるべきである。しかし実際は一部の国民、その上憲法改正に意欲的な立場の人たちが集まったイベントでそういったメッセージをあげている。次の問題点は、2020 年に憲法改正をしようとしていることである。確かに迅速な対応を必要とされる場面はあるだろう。しかし憲法改正には慎重な議論が求められる。それにも関わらず期限をつけて改正、ということはするべきではない。

このように安倍首相には問題点が存在するが、彼を首相にしたのは、私たち国民である。今後、「立憲主義の否定」と言われるような人を首相にしないためにも、授業で教わった政治リテラシーを身につけ、立憲主義を重んじるような総理大臣を立てられるようにしたい。

[参考ウェブページ]

1) 毎日新聞社、「安倍首相 憲法改正に関するビデオメッセージの発言全文」, <https://mainichi.jp/articles/20170504/k00/00m/010/038000c>, 2017/05/20 アクセス。

今回の饗場先生の講義を受けて、今、政府が国家権力を使って日本の危機を招こうとしていることやそれを打開するための選挙が日本では投票率が低い状況であることを知りましたが、僕一人が投票した所で日本全体に影響を与えるはずがないと思うから今回の講義を受けても投票に行っても悪い政治を変えるなんてことはしません。それとお昼ごはん前の講義なのに、ショッキングな映像を 3 連続で見せてくるのは勘弁してほしいです。

共謀罪の核心は、人の会話ですら犯罪化されてしまうことにある。要するに、合意したり、相談したり、言葉に出すことすら許されなくなってしまうのだ。われらが政治に対して無知であるが故に起きた出来事であるにしても受け入れがたい部分はある。テロを恐れてるとはいえ、やりすぎではないだろうか。

今回は政治リテラシーについての講義だった。誤った政治に関する知識を用いて行動し

コメント [U30]: 指摘のとおりなのですが、安倍首相は、「私は自民党の総裁という一政党の立場で言っただけで、総理大臣として言ったのではないから、問題ありません」と反論しています。これどう思いますか。

コメント [U31]: 同じことを最初に感じた他の受講生もいますが、その人は、授業の内容を理解したあと、自分を恥じたと、言っています。

てしまったことで、過去最悪とも言える残虐なナチスドイツのホロコーストが起こってしまったのだろう。私はそこで、その場に居合わせた人皆が誤った政治リテラシーを持っていたのかと疑問に感じた。少数でも正しい考えを持っている人がいたならこのような人災は防ぐことが出来ただろう。実際にホロコーストの映像を見たのは初めてで、残虐さをまじまじと感じた。間違った政治リテラシーをもった人間が政治権力を握るとやはりまともなことは起こらず、必ず犠牲になる人がでてくる。世界平和が謳われている今日、このような人災は2度と起こらぬよう、全世界の人々が努めていくべきである。

コメント [y32]: 現在、世界各地（特に中東とアフリカ）で進行中です。

私は普段ばつとニュース番組をみて、政治家の人々が国会で議論していたり GDP などアルファベットの意味もそれが社会に及ぼす効果もわからずにいた。政治の学習はしていたが、それは勉強のためであり日常生活とは区別して考えてしまい、普段活用されることはなかった。そのため、今回の授業で戦争の映像と震災の映像のちがいがわからなかった。加害の主体とそれへの対策をはっきりとすることができなければ、また何度も防ぐことのできる大勢の犠牲者を生んでしまう。それに加え、国家というものがどれほどに強力で自分達がめんどくさいからと行くのをやめてしまう選挙の一票で世界が 180 度変わってしまうということを知った。今の政治の不安定さを初めて目の当たりにすることになった。自分も茹でガエルのようにじわじわと知らないうちに支配されているかもしれないという危機感に苛まれた。わたしは昨年夏の選挙には年齢上行けなかったが、次の選挙には行きたいし、それまでに日本の政治の現状を知って自分の意見を固めることをしようと思う。

今回の授業では、民主主義について学んだ。小学校、中学校、高校と、今まで民主主義について勉強したことはあったが、今回の授業でこれまで覚えたことは上辺の知識を頭につめこんでいただけにすぎないことだったのだと深く思った。

私が特に印象に残ったのは憲法は国民が政府を好き勝手させないためにあるのだという言葉である。てっきり今まで憲法とは国民が自由であるための大前提となる決まりごとという認識をしていた。なので阿部首相が憲法を改正したことをくつろぎながらテレビでみているが、それがどんなに恐ろしいことなのか今更ながらぞっとしている。

こういった暴挙を見過ごした先に日本も、あのイラク戦争やナチスによる惨劇と同じ状況になる可能性がある。なんとしても防がなければならない。そして防ぐには正しい憲法のあり方を知り自分から政治に干渉することが必要である。

コメント [U33]: そうなんです、大学の勉強はうわべの知識の詰め込み出なく、本質を考え、見抜く訓練です。

コメント [U34]: 固有名詞や数字は間違えないようにしましょう。

今回の授業は、前回の授業コメントに対する説明と、民主主義についてであった。

私は、読書をすることに対しての批判的なコメントへの応答の中の、読解力、論理構成

力、思考力、想像力を磨くために読書をする、という応えに納得した。この読書をするこ
とで得られるものが知識や情報だけではないという点は、スマホなどで情報を得ることが
できるという意見に対して説得力がある。スマホなどで得る情報は、誰にでもわかるよう
簡単に短くまとめられているものが多く、そこから読解力や論理構成力などを培うことは
難しいからだ。

民主主義については、政治リテラシーを身につけることの重要性について学んだ。

総合科学入門講座の目標の一つは、根拠に基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し
合意を形成する能力を養うことである。これは民主主義の仕組みにおいて不可欠なプロセ
スであり、この民主主義の基本の観念が政治リテラシーである。この政治リテラシーの前
提の認識があるかどうかの例として、沖縄にある記念碑の碑文が紹介された。どこか引ッ
かかる点があるかと聞かれた上で読んだためということもあるかもしれないが、戦争の犠
牲者と災害の被災者を一緒くたに捉えている点に違和感を感じた。天災と人災を一緒くた
に捉えると、加害の主体とそれへの対策を見失う。

また、最もひどい人災は、国家が加害者となり国家権力によってもたらされるものであ
るという話では、戦争の映像で惨状を見たことで日本でも起こりえる身近なものに感じた。
人災が起こることのないように、国民が政府を変えることができる選挙では積極的に投票
をするようにしたい。

私がテロ等準備罪に対して疑問に感じるのは、「意味があるのか」ということである。監
視社会になることを危惧する声もあるが、多少の監視くらいでテロが防げるなら安い物だ
し、共謀罪が適用されるような事をする予定があるのかと逆に聞きたい。しかし、自由の
一部を代償とする以上、意味のない法律を作られては困る。適用は組織的犯罪集団に限ら
れるとされているが、ヨーロッパで起こったテロの中には一般の個人がIS等に感化された
ことで起こったものもあり、組織的犯罪集団のみを対象とするのでは不十分である。また、
現在の法律でも共謀を含む犯罪未遂の段階で裁くことは可能であるため、この法律の制定
によってテロへの対策能力が上がるかと問われたら、そうでもないだろう。

そうするとテロ等準備罪の法案に対し、我々は代償だけを払ったことになる。

今回は民主主義について学んだ。まず民主主義は客観的な根拠から合理的解釈を導き出
し、他社と対話し合意を形成するという基本を学んだ。その中で、政治リテラシーの力を
身につける術を学んだ。政治リテラシーを身につけなければならない理由に強大国家権力
性悪説がある。ナチスドイツの例から、周りに流されるだけでは国家の暴走を止めること
は出来ないことを学んだ。民主主義は政府が権力を暴走させる前に危険を察知して変える
ための制度であり、憲法は政府の行動自体を縛るためのものだと学んだ。

コメント [U35]: 指摘の意味はわかります。
先日の講演会で元警察幹部の人が言ってい
ました、「法規制ではテロは取り締まれない」
と。

日本の民主主義が今危機に面しているということも学んだ。秘密保護法によって国民に対して必要な情報が伝えられない危険性や、共謀罪の強行採決によって政府の国民に対する監視の目が強化される危険性など、日本の民主制が危機的状況に陥っている重大さを改めて実感した。

これらの危険を察知し、変えるために行動しなければ、日本もナチスのように国家権力が暴走してしまう危険がある。そんな現状を日本中に知らせ、特に若者が行動を起こせるように大学などの学ぶ場での政治リテラシーを高めるための講義を増やす事で、日本人の政治リテラシーを高め、民主制を回復させることが出来るのではないかと考えた。

今回の講義では民主主義について学んだ。私たちは日常で政治について考えたり話し合ったりすることはほとんどないが、それは非常に危険な状態である。そんな政治に無関心な状態が続くと気がついた時には戦争に巻き込まれていたなどということがあり得る。現在の政権の集団的自衛権に関してもそんなことが起こっている。集団的自衛権とは他国が攻められたときに他国と一緒に反撃に加わることができるという権利だ。この権利はこれまでの憲法の解釈の仕方とは異なっていて、この解釈をすることによって私たちの国の安全が危うくなりつつある。気づいたときにはもう遅い茹でガエル状態にならないためにも政治に対する関心、知識、行動力などの「政治リテラシー」を身につける必要がある。

私は普段、ニュースで戦争のことを目にしても、悲しいことだとは思うがどこか遠い国で起きていることだと感じていた。しかし、今回の講義でテレビで見ている惨状はどこにでも誰にでも起こりうるものだとわかった。惨状を回避するために自分でできることをしなければならぬ。まずはニュースで出てきた言葉を自分なりに調べ、解釈して政治に関する知識を深めたり、選挙に行ったりすることから始めていきたい。

5月19日の授業では、「政治とは?」の疑問に基づき、立憲民主主義や「政治リテラシー」の必要性について学んだ。

まず初めに考えたのは沖縄の碑文である。「戦争(人災)と災害(天災)を一緒にしてもいいのか」。私も碑文を見たときに「ん?これはおかしいのではないか?」と引っかかったところであった。ここで考えるべき点は、「加害の主体はどこで、どのようにもたらされるのか。そして、どうやって回避・解決するのか」ということである。例えば地震や津波などの天災は加害の主体が自然にあって、避けようがないことである。しかし、戦争やテロなどの人災は加害の主体が人間や国家にあり、避けることができるものだ。両方の衝撃的な映像をいくつか観たが、直視できないほどのひどい現実が映し出されていた。特にホロコーストの収容所での大量虐殺後の映像は吐き気を催すほどの衝撃があった。

だが、この人災は避けることができるのだ。収容所での虐殺は国家が加害の主体であり、その権力は強大である。個人だとせいぜい殺せても二桁だが、国家になると七、八桁だと聞いた。そしてその権力を濫用することで、多くの被害を生み出す。ここで大切になってくるのが「政治リテラシー」の獲得だ。「政治リテラシー」は危機を敏感に知り、果敢な行動をする力を身につければよいのだが、その獲得に必要な前提の認識として、「強大国家権力性悪説」というのを知っておく必要がある。これは国民の意思表示による民主主義によって悪政府を変えることと、憲法によって政府の行動を縛ることによって変えることができる。そのため現在の日本では低投票率が問題になっているが、きちんと政治を知って投票に行き、自分たちで自分たちの国家を作っていかなければならないのである。「収容所で起きるということはほかの場所でも起きる」ということを念頭に置いて、人災をいかに減らすか、ということ自ら考えていくことが必要だ。

今回の総合科学入門講座は民主主義についてだった。総合科学入門講座の目的の一つである、根拠に基づく合理的な考え方で他者と対話・合意することは、民主主義に不可欠である。我々は政治リテラシー(政治に関する関心、知識、行動力)を身につけ、危機を敏感に知り、果敢に行動しなければならない。なぜなら、我々が動かなければ民主主義は機能しないからだ。では、政治リテラシーを身につけるのに必要な前提の認識は何だろうか。

世界では今も戦争が起こっている。戦争は、災害などの「天災」と違い、「人災」である。「人災」は防げるものである。しかし、誰かが攻撃を加えているので戦争が起こってしまう。そして国家が加害者になり、その権力によってもたらされる戦争では7、8桁の死者を出すほどの甚大な被害が出てしまう。それほど国家の権力は大きく、使い方を間違えればとんでもないことが起こってしまう。それを防ぐには、民主主義と立憲主義の確立と維持が必要である。民主主義は選挙という方法で比較的容易に政権交代ができる。つまり悪い国家は変えることができるのである。立憲主義は憲法で政府の行動を縛りながら行う政治の仕組みである。日本ではこれらの仕組みが危機に陥っている。民主主義に欠かせない有権者が投票に行かなくなっている。また安保法制や集団的自衛権の行使について立憲主義が軽視されている。立憲民主主義が崩れてしまえば、国家権力が濫用される可能性が生まれ、戦争の悲劇が繰り返されてしまう。

以上から我々は政治リテラシーを身につける前提として「強大国家権力性悪観」を認識しなければならない。国家の権力はとても大きく、悪いものであるという認識だ。その権力を濫用されないためには我々が政治リテラシーを身につけ、政治参加することが求められる。そして日本の現状を把握し行動することで危機回避ができる可能性が生まれるのである。

共謀罪が強行採決されたが、怒号が飛び交う中で採決が行われたのは政府の決め方として異常である。これまでもいくつか同じような状況で採決されていたが、**小学生の学級会**

でももう少しマシな話し合いが行われているだろう。そのような状況で国民が納得できる決議ができるとは思えない。話し合いをする場であるのに、話し合いすらままならない状況はひどい。国家としてそのような行動はすべきでない。

コメント [U36]: そうですね…。

今回の授業では政治リテラシーについて学んだ。政治リテラシーとは政治に対して関心を持ち、情報を知って、行動することである。なかでも「政治に対して関心を持つ」というのは最も重要なことである。

授業の中では中東でのアメリカ軍による爆撃事件と東日本大震災の映像・写真を見た。この2つは「悲惨である」ということは共通しているが、「人災」と「天災」という決定的な違いがある。天災に関しては根本的に解決するということとはできないが、人災には必ず原因となるものがあるのでそれを知らなくてはならない。私はこれまでこの違いについて強く意識していなかったため、これからは心に留めておきたい。

また、選挙が行われる際には必ず投票の行くようにすると決意した。

今回は立憲民主主義—政治リテラシーの必要性—というテーマだった。政治に対する危険を敏感に知り、危険な状況から飛び出すことが大切であるということが分かった。最もひどい人災とは国家が加害者になるもので、市民がひどい被害にあわないためには民主主義と立憲主義の仕組みの確立・維持が必要である。

私も選挙権を与えられる年になったので、自ら政治に参加する義務と権利がある。自分が被害にあう前に政府の行動を抑止できるように政治に敏感にならなければならない。"

今回の授業は民主主義についてだった。人災と天災の違いや人災を防ぐための政治とその機能、そして懐疑の目を持つことの大切さを知った。序盤の映像も(特にイラク戦争の映像)初めて見るものが多かった。今でも鮮明に思い出せるくらいには刺激の強い映像だった。また、民主主義を学ぶことは大切なことであるが、この総合科学入門の授業でもする必要はあったのだろうかという疑問を持った。

コメント [y37]: 疑問を持った理由を説明してください。

今回の講義は「民主主義論」とりわけ「政治リテラシーの必要性」について学んだ。この講義では「なるほど」と頷ける部分が多々あり、非常に有意義な講義であった。特に、国家権力の強大さは無視できないものであり、無関心のままでいると危機に反応できず悲惨な結果を迎えてしまうだろう。

悪い政府を変える、政府を縛るといった意見はとても納得ができるのだが、我々は報道

を通してなど間接的にしか日本の政治を知ることができない。メディアが偏向報道で「良い政府」を「悪い政府」として扱うことも頻繁にある。そういった情報の取捨選択はどのように行えばよいのだろうか。

今回の総合科学入門講座では民主主義論という講義だった。政治に関心がなく放っておくといつか国家は暴走するというのはその通りである。日本人は戦争が終わってから長い時間そういった危機感がないからである。だから関心をもって国家を監視しなければならない。また、人災と天災は一緒にしてはならない。先生が言っていたように加害の主体を見失ってしまい、それで良かったとになってしまうことがあるからである。ここからの内容は非常に疑問が残った。テロ等準備罪のことを共謀罪と言ったり、集団的自衛権を批判したりというような反自民党の主観的な意見ばかりであったからである。もっと中立的に講義するべきである。何も知らずにあの講義を受けたとすれば絶対自民党は悪であるという意見をもつだろう。テレビも新聞も偏向報道ばかりなので気を付けていきたい。

今回の授業では民主主義について学んだ。政治について関心がなかった私は初めて知ることばかりだった。東日本大震災での被害者は天災によりおこったことで誰もせめることは出来ない。「大自然の前に無力人間」と先生がおっしゃっていたがそのとおりだ。しかし、戦争は人災であり誰かが起こしたことでさらに誰かが止められたことでもある。社会を平穏にするためには政治が必要である。政治に必要なのは価値配分と権力である。悪い政治は強大な国家権力性悪観になる。解決するには1 悪い政治を変えるための民主主義 2 政治の行動を縛る憲法が必要である。国家が大きくなると悪い人もでてくるし大きな力となり過ぎてしまうからだ。政治が悪い方向にいても国民は気づかなければ意味がない。そのためには、知ること関心をもつことが大切である。そうすることで現状を知り行動することができる。自分の住んでいる国の政治の現状は最低でも理解しておくべきだ。

講義のはじめに、天災か人災かについての内容で、天災と人災を同じような扱いをした碑文を見て、私や私以外のクラスメイトも、この碑文が戦争と震災を同じこととして扱っていることがおかしいということに気づくことが出来なかった。これはいかに私たち大学生に、戦争や震災への興味・関心、また政治リテラシーが欠けている学生が多いということを表している。このままでは政治は内閣の思い通りになってしまったり、戦争を軽視したりすることが当たり前になってしまう可能性もあるため、現代の日本社会は危険である。「現代は戦争をしない平和な時代」と勘違いしているひとも多い。実際に私もその中の一人である。ナチスドイツの人間の死体がまるで人間の遺体を扱っているようには見えない

コメント [y38]: これまでの授業で述べてきたことと同じです。匿名の情報源は信用しないこと、複数の情報源を確認すること、一次資料を確認すること、などです。それに加えて、普段からたくさん本を読んで、知識だけでなく「ものの見方」を身につけておくことが必要です。

コメント [U39]: 後期の一般教養の授業「政治とメディア」でもその辺の話をします。

コメント [U40]: この法案の呼び名はメディアでも分かれています。確かに政府は「テロ等準備罪」と言いますが、内容はこれまで「共謀罪」として3回提案していずれも反対が多く廃案になった共謀罪と同じです。

コメント [U41]: 集団的自衛権は立憲主義の観点では全否定ですが、他の観点では肯定できる面があります。今回は時間がないので詳しく説明できませんので、「国際政治学入門」の授業を傍聴するか、研究室に来れば詳しく話します。

コメント [U42]: テレビや新聞などのマス・メディアは民主主義の政治では中立ではなく反政府に偏って当たり前なのです。その辺の話は後期の「政治とメディア」でも説明します。

ような方法で処理されていたり、内戦で爆弾により首をとばされた死体の動画を講義で見て、実際に世界で起こっていた、また現在も起こっていることとはとても理解し難いものだったが、安倍政権になり、戦争ができる国へと近づいていっている日本の国民である私たちも他人事としてとらえず、今の私たちの行動が日本の未来へと繋がっていることを念頭におき、日々生活していかなければならない。

今回の授業では、根拠に基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し合意を形成する能力という民主主義の仕組みにおいて必要不可欠な政治リテラシー、つまり政治に対する関心、知識、行動力の獲得の重要性について学んだ。

私の考えは、自分たちのような若い世代がもっと政治リテラシーをもつ必要があるということだ。なぜなら、これからの未来を担っていくのは私たちの世代であり、政治が悪い方向に向かいそうな時にそれを阻止しなければならず、それには政治リテラシーが必要になるからだ。また、昨年の公職選挙法の改正による選挙権の年齢の引き下げが若者の政治リテラシーの獲得に良い影響を与えてくれることを期待している。

国際政治学入門という講義を取っていたから今回の授業は二回目だった。

「人災」と「天災」の違いをいっしょくたにはいけない。人災は防げるからだ。ナチスドイツのようなことは世界中のどこでも起こりうる可能性がある。人事ではなく戦前の日本も似たようなことをしていた。

加害の主体を見失ったままなら同じ惨状に苦しむ。私たちが積極的に政治に関わることで防げる。なぜなら、私たちが政治の問題例えば共謀罪などを理解し考えて良いか悪いか選挙に反映させる。今の政治は憲法を軽く見て解釈改憲などをして憲法を変えてしまっている。このままでは権力が暴走する可能性がある。だからこそ、よく考え選挙に行かなくてはならない。沖縄にある記念碑の碑文を見て引っかけりを覚える人にならなくてはならない。政治リテラシーを身につける必要がある。

今回の総合科学入門講座では、民主主義について学んだ。

「根拠に基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し合意を形成する能力」は民主主義の仕組みにおいて不可欠である。私たちは政治リテラシーを獲得する必要があるのだ。茹でガエル状態にならないためには、危機をいかに敏感に察知し、果敢に行動できるかということが問われてくる。私たちはまず、政治リテラシーを獲得するために政治に関心をもつこと、正しい知識をつけること、行動することが重要である。

さらに私たちが忘れてはならないのが、国家権力の強大さ、国家権力の濫用可能性であ

る。この強大国家権力性悪観を常に前提しておくべきである。悪い政治は民主主義によって変え、憲法によって政府の行動を縛ることが今必要なことである。

今回の講義は民主主義についてだった。民主主義を考える上では、「政治リテラシー」の獲得が必要になる。政治リテラシーとは、政治に関する関心、知識、行動力のことである。戦争の被害と天災の被害の違いを例に挙げてみると、天災なら病むを得ず、「大自然の前に無力な人間」という謙虚さを認識するしかないが、人災は誰か「やったやつ」がいるということで、避けることができるものである。加害の主体は何か、それへの対策は何かを見失わないことが必要となる。最もひどい人災とは、国家が加害者となり国家権力によってもたらされるものである。

次に政治について考えた。地球上に人が 1 人しかいなければいなければ政治はない。複数の人がいると利害がぶつかるので、社会における利害の調整と解決のために政治がある。その政治が機能するには価値の配分と権力がある。ひどい戦争から、国家権力の強大さや国家権力濫用可能性がわかる。これを強大国家権力性悪説という。この悪い政府を変えることは民主主義であり、選挙で平和的に容易に政権交代できる。しかし、投票率の低下が近年問題になっている。これからの政治について考えていかなければならない。また、政府の行動を縛ることは憲法であり、政府や国家の行動を縛る規制・ルールである。これを立憲主義という。しかし、今政府でなく国民を規制する自民党改憲法が問題になっている。これからの日本について私達 1 人 1 人がしっかり考えていかなければならない。

「ヒトラーは悪の権化」という言われ方はもはや当たり前のようにになっているのが、人間の怖いところだ。ヒトラーはただの悪人ではない。あくまでも当時はドイツに望まれ、熱狂的な支持を受けた英雄だったに違いない。だから絶大な権力を持ち得た。無能でもなく、彼の演説力が民衆の心を動かした。注視すべきなのは、人は状況によってはほとんどなく冷静さや客観性を欠くということである。いくら歴史を学んだところで、それを忘れては意味がない。民主主義において最も重要なのは、誰が権力を持つかではなく一人一人が現実を直視することだ。私としては今の首相のやり方に不安を覚えたことはない。日本には戦争という苦い経験があり、平和を守らなくてはいけないという考え方は正当である。しかし今日の国際状況は決して安定しているとは言いがたく、北のミサイル発射のニュースが流れては知識人が議論し国民は不安にさらされる。それらの番組を見ていると日本人の意識の問題点が見えてくる。多くの日本人が心配しているのは、実は国の行く末ではなく今まで保たれてきた「平和」が壊されてしまうこと、ひいては環境が変わることではないだろうか？日本や世界の平和に貢献しているという意識のある人などほとんどいないと思うが、それはつまり大した努力もせず漠然と信じてきた「平和」の概念が脅かされ

コメント [U43]: その通りです。そこまでの話は授業では時間がなくできませんでした。

コメント [U44]: 大事な点ですね。日本の平和・安全と安保法制の問題は今回は時間がなく、とても説明できません。私の一般教養の授業「国際政治学入門」で詳しく話すので傍聴するか（月曜 5 コマ目）、時間があわなければ直接研究室に来てください、いくらでも説明します。

ることこそ怯えているということだ。日本が平和ボケしていると言われる所以はここにあるのではないだろうか?過去はかたくなに守るものではなくより良い未来を作る教訓とすべきである。人間が生きる限り世界の変化は免れないのだから、ただ不安がるよりもそこでのあり方を模索する勇気を国民は持たなくてはならない。国のことは誰かに任せて、不安を煽られたときだけ文句を言う、それがまかり通るのもまた民主主義だ。

今回の総合科学部入門講座では、政治リテラシーについて学んだ。社会をより良くしていく、いい社会を守るためにも巨大な権力を持った政府を、憲法と我々で制御する必要があることを知った。政府を制御する上で選挙に行くことはとても大切なことであり、若者の投票率が低いことは大きな問題である。投票にいかないということで、政府の活動を認めていることになり、行き過ぎた政策にもストップをかけることができない状況になってしまうからだ。例えば、今回の授業では詳しくは説明されなかったが、その後調べた「共謀罪」についての法案が通りそうな現状に私は恐怖を感じた。なぜなら、この法案が通るとテロ組織の活動を未然に防ぐことができるメリットもあるだろうが、それ以上に政府に反動的な活動など行っている団体など無差別に取り締まり、それによって国民の発言の自由が奪われてしまう可能性があるからだ。国民の発言の自由が奪われてしまったら、政府の暴走を止めることはできなくなり、最悪戦争が起ってしまうだろう。現在の安倍政府は、「特定秘密保護法」や「集団的自衛権の行使」などについて、改革と呼ばれるようなものを行っているが、私にはこれは戦争に向かっていくようにしか思えない。なぜなら、国民の知る権利が奪われ政府の活動を監視、制御できなくなり、また、日本が攻撃されなくとも同盟国が攻撃された場合は戦地へ赴かなくてはいけなくなり、戦争に参加する危険性が高まっているからだ。日本には憲法第九条といった平和を維持していく上で世界に誇れるものがある。今回の授業で大きな権力の恐ろしさを感じる映像をみて、日本もこのようになってしまう可能性は大いにあること、そしてこのような残虐な出来事が起こらないよう政府という大きな権力者を制御しなくてはいけない、また憲法第九条の意味や大切さについても一度考えるべきだと思った。戦後 72 年、政府がまた戦争へと近づいているように感じる今、我々は政治についても一度考え国民みんなで政治を行っていく必要がある。まずは、私自身が有権者であることを自覚し、それぞれの党の方針や考え方をきちんと調べ、友達とも意見を交わしあいながら政治への関心をいっそう高めていきたい。

今日の総合科学入門講座では、立憲民主主義・政治リテラシーの必要性について学んだ。その中で、私たちが出来る事として選挙を通して国家に意思表示をすることが挙げられた。

ドイツのヒトラーは国民の投票によって選ばれ、ドイツを軍事独裁国家とし、そして第

二次世界大戦へと突き進んでいった。この独裁者を国家のトップにしてしまったのが国民であると改めて知った時に、私たちが政治に関心を持ち国家が行うことが本当に正しいことなのかを見極める目を養うことが必須であると分かる。その目を養うために、政治に対して常に疑問や考えを持つことが必要であり、それをするためには政治に関心を持つことが大前提である。私自身今日の映像を通して、過去の失敗例を知ることで主体性を持って行動する必要性を知れた。ただ、政治に関心を持つべきだ、選挙に行くべきだと言っても、人々の意識は高まらない。第二次世界大戦のような実際に起こったことを映像を通して見ることは大きな衝撃を与え、そうならないためにどうすべきか考えることを促す。テレビ番組などを通してもっと国民が考える機会を作ることが必要であると考えている。政治について考え行動することは私たちの命を守るためにも非常に重要なのである。

今回は饗場先生から政治についての抗議講義を受けた。戦争と地震による災害は、大勢の人が犠牲になったという点では同じだが、人が人を傷つけたことと同じにはしてはいけない。世の中の動きに無関心でいることはあまりにも危険だ。誰かが言ったから正しいと、情報を鵜呑みにするのではなく、自分の目で判断する力を付けないと、知らないうちに加害者、被害者になることもあるかもしれない。私たちはもう「知らなかった」ではすまされない年齢になっている。

政治と宗教の話があったが、政治には関わっていかないと社会人として何も出来ない。私は政治についてあまり考えてこなかった。しかし、選挙など、身近なところに政治と関わるチャンスはある。これからは政治に目を向けていきたい。

立憲民主主義について話を聞いた。政治リテラシーとは政治に対する関心・知識・行動力のことであり、これを獲得していれば社会の危機を敏感に感じ取り行動にうつすことができる。政治リテラシーを身につけるための前提の認識として強大国家権力性悪観を持たなければならない。それは国家の権力とは強大なもので、国家が権力を濫用する可能性があるというものだ。そのようにならないようにするためには政治リテラシーを獲得し行動をとる必要がある。しかし、選挙の投票率の低下に見てとれるように一部の人々の政治への関心は低下している。「政治には関わらないほうが無難だ」と考えている人もいるだろう。政治への無関心こそが国家が権力を濫用する可能性を増加させているのではないだろうか。民主主義社会に生きる私たちは自分たちで社会を変えることができる。国の言いなりになる前に国家という猛獣の手綱を国民が握らなければならない。

今回の講義は「民主主義について」というテーマだった。「政治リテラシー」という言葉

は初めて聞いたが、それは政治に対して関心、知識を持ち、行動することであった。おかしな政治に敏感に反応し、その対処のために果敢に行動する力の低下が若い世代で顕著である。それは私自身も感じる。「政治」に対して「関わらない方が無難」と思っていたからである。しかし、今回の講義を受け、もっと若い世代も政治に介入していかなければ自分たちが「ゆでガエル」になってしまうという危機に気付くことが出来た。私たちの世代は、今回の講義のようなまず政治の仕組み、動きを知ることができる機会がもっと必要だ。また、マスメディアの影響力も大きいので、テレビの放送などが与える政治に対する難しそうなイメージを取り払うことも重要だ。今回の講義は、政治に無関心であることが自分にどう降りかかってくるか、ということをも具体的に知ることが出来る、良い機会だった。

政治リテラシーとは政治に対する関心、知識、行動力である。私たちは「ゆでガエル」にならないためにそれを身に付ける必要がある。そのうえで必要な前提の認識とは、強大国家権力性悪論である。

政治を行うのは政府であり、国家権力は非常に強大なものである。また、国家の首相や大臣が人間である以上、無能、邪悪な人間に濫用される可能性がある。そのため、私たちは選挙で平和的に悪い政府を変えることができる。これが民主主義である。また憲法によって政府の行動は縛られている。憲法があることで、国家権力が暴走することを防ぐことができる。私たち市民はこのような、民主主義と立憲主義の仕組みを確立、擁護していかななくてはならない。

自民党は2020年に憲法を改正したいとしているが、**憲法を改正することは「猛獣自体が檻を壊すこと」**なのでしょうか。

今回の総合科学入門講座では政治リテラシーについて学んだ。私は講義で指摘されたように普段から政治について考えるということを避けたり、友達と話し合うほどの知識を持っていなかったりと関心が低いという自覚がある。しかし、沖縄にある祈念碑の碑文には私も違和感を感じた。その違和感を感じた理由は映像をみてはっきりした。シリアやイラクと東日本大震災では、どちらも同じように大切な人が突然亡くなり涙を流して悲しんでいる人がいて、目を背けたくくなるような亡くなり方をしている人達の姿が映っていた。同じ映像の中にあっただきな違いとは、天災か人災かの違いであり、私が感じたのは憎み恨む相手がいるかないかである。東日本大震災の場合は天災であり、人の力では回避することができない。しかし、シリアやイラクは人災であり、相手がいたから起きた最悪の出来事であり、回避することができたはずである。

このような悲惨な出来事が起こる前に私達の権利である参政権などを大切にしていきたい。

コメント [y45]: 改正の内容によるでしょう。

コメント [U46]: 憲法を変えようとするのが、政府・国家であれば猛獣が檻を壊すことですが、市民・国民が憲法を変えるのはなんら問題ではありません。

沖縄にある記念碑の碑文を見たとき、何とも思えなかったのが歯がゆかった。改めて考えると全くもってその通りである。人災と天災を一緒くたにし、見逃したままでいることに何の違和感も持たない人が多いという現状の方が、異常なのかも知れない。

また、せっかく選挙という平和的に政権交代のできる方法があり、その権利は平等に与えられているのに、低投票率なのも何故なのかと思う。やはり、政治の現状を知る機会が少ないのが一番の原因なのではないか。多くの人が「自分の票が政治を左右するのだ」ということはわかってはいるが、「今政治はこのような状況で、だから私はこうなるようにしたい」というところまで考えが及んでいないのだ。恥ずかしながら私も含めてである。中学・高校に「学活」と呼ばれる授業があるが、その場で定期的に、時事的な政治の話をしてもいいのではと思うのだが、どうだろう。

コメント [U47]: いい提案ですが、現状の中学・高校の先生は躊躇すると思います。

1. 授業のまとめ

根拠の基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し合意を形成する能力は、総合科学入門講座の目標の一つであり、民主主義の仕組みにおいても不可欠である。また、民主主義の仕組みを理解するためには政治リテラシーという観点が必要であり、最近この観点は重要性を増している。政治リテラシーとはどのような観点なのだろうか。

政治リテラシーとは、政治に対する関心、知識、行動力のことを指す。もしこの政治リテラシーを身に付けていないと、どうなるのだろうか。

政治リテラシーに必要な基本の視点として、「強大国家権力性悪説」が挙げられる。「強大国家権力性悪説」とは、国家の権威が指示を出せば、7桁乃至は8桁という膨大な死者が出得るといふ国家権力の強さ、邪悪な人間が国家権力を行使する可能性が常にあるといふ国家権力の濫用可能性のことをさす。このような事態を防ぐために、悪い政府を変える、政府の行動を縛るという対策が必要である。政府を変える、政府の行動を縛るためには、民主主義と立憲主義の仕組みの確立・維持が大切である。

2. 授業に対する意見

国際政治学入門の授業で習った内容ではあるが、もう内容を復習できる良い機会であった。授業で見た動画も二回目ではあるが、思わず目を逸らしたくなるくらい残酷なものだった。しかし、この動画のような惨状が私たちの日常でも起こり得るのである。それを防ぐためには政府や国家の行動を縛っている私たち国民が行動を起こすことが大切であると学んだ。その方法とは、選挙に行き投票をするということである。

しかし、授業の中で、20代の投票率が減少していると先生がおっしゃっていた。その理由としては選挙に行く利点がない、政治が自分には関係ないが多いだろう。たしかに、このように考える若者は少なくはないだろう。だが、投票する者少ないと政府を国民が縛る

ことは困難になるという事態が起こる。

このような事態を未然に防ぐためには、今日の授業のような内容を多くの人が知り、理解することが大切だと考える。

今回の講義は、政治リテラシーについてだった。政治リテラシーとは政治を読み取る、いわば読解力のようなものだ。この能力が、日本の民主主義を成立させる上で不可欠なものだ。しかし、近年の日本はゆでガエルになりつつある。ゆでガエルとは、危機に鈍感で結局、死んでしまうカエルである。つまり、近年の日本は、危機に対して関心がなく、引き返すことが難しくなる事態を引き起こそうとしているのである。それが分かる、沖縄の慰霊碑の画像を見た。戦争と災害による被害を同じとしてしまっている。戦争は人災であり、災害は天災だ。発生源が違う。戦争は人間によって起き、災害は自然によって起こる。前者は避けようがあるが、後者は避けようがない。では、前者の戦争を避けるためには、どうすればいいのか。それは、国家の運用次第だ。国家が一度権力を乱用すれば、ナチスのようにになってしまう。国民が政治リテラシーを持ち、政治に積極的に参加をすれば、ゆでガエルにならないで済み、危機を回避出来る。

日本は戦争に近づいているとは言わないまでも、今の安倍政権は独裁・軍事国家への道を辿ろうとしている。それは、秘密保護法や、安保法制で国民の権利を着実に制限しているからだ。集団的自衛権の行使の問題については、国の命令で死に行けと言われているようなものだ。最悪、戦争にならないように国民が投票をして意思表示をしなければならない。しかし、投票率は依然として低下している。特に20代はどの年代においても最低値だ。(5月19日 スライドより)一番忘れてはならないことは、もし戦争に行くとしたら一番先に死ぬのは投票率が最低値の20代の若者達だ。生き残るのは、政治などがまだよく分からない小さな子供達と、戦争に行けと言ってただ上から命令する少なくとも若者とは呼べない人達だ。また、力が弱い女性や高齢者達である。そのような悲惨な状態にもう一度ならないように、私達は投票をして、意思表示をしなければならない。

●まとめ

今回は民主主義について学んだ。

「政治リテラシー」を獲得するということは政治に対して関心を抱き、知識を持ち、それを行動に移すことができるようになるということである。「ゆでガエル」のたとえのように、急にではなくだんだんと悪い方向に傾いていることにも気づけるくらい危機に敏感になり、思い切った行動ができなければならない。

政治が機能するためには価値配分と権力が必要である。しかしその権力が適切に配分されないと戦争や虐殺という事態に至ってしまう。そうならないためには、悪い政府は変え

る、政府の行動を縛る、という二つのことが重要である。これらはそれぞれ民主主義であること、憲法が存在することで守られていた。しかし現在は選挙に行かない若者の増加やメディアが衰退しつつあること、政府が憲法の解釈を変えたことなどによって揺らいでいる。だからこそ、ゆでガエルが死を迎えるような結末を迎えないように政治リテラシーを獲得する必要がある。

●意見、感想など

まず沖縄の記念碑の碑文について。記念碑の碑文に違和感を持った人が政治リテラシーに政治リテラシーがあるとすることに疑問を持った。なぜなら、天災は人が起こすものじゃないから仕方がない、と人々が死んでいくのを、政府や自治体は指をくわえて見ていていいわけではないからだ。私は、政府や自治体には被害をできる限り小さくするためにできること、しなければならぬことがあり、それを怠ったが故に犠牲が発生してしまったならそれは「人災」であると思う。この視点で見ると、兵庫県知事は「天災からも人災からも人々を守る社会を目指しましょう」という意図で書いたと解釈でき、天災と人災を一緒にしてしまっていることに違和感がない。

次に安倍政権が憲法の解釈を変えたことの重要性について。(主観になってしまうが)私には、安倍政権のやったことは絶対間違っている、という主張のように聞こえた。確かに憲法や民主主義の観点から見れば重大な問題であることは理解できる。しかし、もし日本に集団的自衛権がない状態で、アメリカが攻撃されても日本は助けられないのに日本が攻撃されたらアメリカ軍が助けしてくれるというのは、アメリカ軍兵士の命の尊さよりも日本の自衛隊員の命の尊さの方が重視されているかのようである。そのために今まで多くの議論が行われてきた。この側面を考慮せずに絶対間違いだと断言するのはおかしい。

最後に。私たちがゆでガエルのようにならないためにできることの一つに、選挙に行き、真剣に考えて決めた候補者に投票することがあると思う。私は以前の選挙の時はまだ17歳で権利がなく選挙に参加したことがないが、友人で選挙に行った子がいたこともあり、私なら誰に投票するかを考えた。その時に思ったのは、マニフェストで選んでも実行に移さないものもあるだろうし、選挙活動から「この人は絶対に汚職事件を起こさない」とわかるわけではないだろうな、ということだった。候補者を信用できないのである。何を基準に選べば良いのだろうか。マニフェストや選挙活動の全てを信じた上で、自分の理想の社会になる人を選べば良いのだろうか。

今回の授業を一度教養教育の授業で受けたことがあったので受けるのは2回目でした。茹でガエルに自分もなっていると思ったので、その授業の後に共謀罪の危険性を伝える講義に参加した。政治に関して自分から学ぶことは初めてで、共謀罪が何かも知らなかったが、自分から関心を持つことの大切さを実感した。大学生として、ニュースを聞き流した

コメント [U48]: この問題はいろいろ論点ありますが、授業では時間がないので、研究室に来てくれれば詳しく言います。一つだけ、日本はアメリカに集団的自衛はしないのに、アメリカがしてくれるのは一見、不公平ですが、代わりに日本に米軍基地を常駐させているので、十分公平といえます(沖縄の人に肉体的、精神的犠牲を負ってもらい、思いやり予算で米軍駐留経費の75%ぐらい日本でもっています)。

コメント [U49]: 政治は「妥協のアート」とも呼ばれますように、すべて約束通り、皆が喜ぶようにはなりません。各政党ごとに、どういう社会を志向しているのか、という大きな方向性がわかると、よいですね。

りなどのこれまでの受け身の姿勢を改めたいと思った。

今回の総合科学入門講座の題材は「民主主義論」についてだった。この講座ではまず、「政治リテラシー」の獲得の必要性・重要性について学んだ。この「政治リテラシー」という観点は、総合科学入門講座の目標の一つである、「根拠に基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し合意を形成する能力」、これは民主主義の仕組みにおいても不可欠のプロセスであり、民主主義をめぐる最も基本的な観点でもある。

ではこの観点がなぜ必要性、そして重要性を増しているのだろうか。まず講義の最初に「沖縄にある記念碑文」を見て何か引っかかる所があるか、という私たち学生の「政治リテラシー」を身に付けるうえで必要となる「前提の認識」を持てているかどうかを問われた。その碑文を見てどこか違和感を得られた学生は少なかった。その結果が、今の学生の「政治」に対する無関心さから来る、知識の欠如という現状を表していた。

私たちは「政治」に対して無関心である。これは私たち自身よく理解している。普段から家族や友人とも、政治の話をする事などなければ、政治と触れられる機会でもある新聞やニュース番組ですらも見ることがない。内閣府が行った7カ国の若者たちに対する意識調査で、政治に対する関心度について、「あなたは今の自国の政治にどのくらい関心がありますか」という問いに対して、日本の若者は50.1%が『関心がある』（「非常に関心がある」9.5%+「どちらかといえば関心がある」40.6%）と回答している。だが、政策決定過程への関与についての「私個人の力では政府の決定に影響を与えられないと思うか」という質問に対して、61.2%が『そう思う』（「そう思う」27.6%+「どちらかといえばそう思う」33.6%）という回答になっている。（内閣府「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」、www8.cao.go.jp、平成26年6月）。このように日本の若者たちは政治に興味はあるものの、実際に自分が政治に関与する者、国の政策を担う者としての実感もなく、「自分のこと」としては捉えられていない。そうすると、政治に対して「興味がある」という回答についても、どこか、「興味が無い訳ではない」という「政治」に対する関心が本当に積極的で自発的なものではないような意味合いにも取れてしまう。きっと誰も政治の重要性も、それに国民が参加しなければならないという義務、そして責任を知っている。興味を持たなければならない、と理解している。だがそれもどこか他人事であり、政治に関わることは自分たちのためとなることであると、**関わらないと私たち国民にとって不利益になり得ると分かっているけどどうしてもその「他人事」である感覚を無くすことができない。**

私たちには政治に参加する権利が与えられている。民主主義であるのだから悪い政府は変えられるし、政府という猛獣を縛る憲法だって持っている。だが、私たちが今自分たちに起こっている「危機」に気づかずに、行動を起こさないと私たちはただの「ゆでガエル」である。どうやったらただの「ゆでガエル」が暴れ出した猛獣を止められようか。政治に関心を持ち、政治を知り、そして行動する。講義の中で見たシリアやイラクにおける戦争

の被害、ナチスドイツによる国家権力の濫用のために起こった惨劇。「ここで起こるということは、どこでも起きるとのことだ。私にも、誰にでも。」その惨劇を目の当たりにした者の言葉はとても印象深く記憶に残っている。私たちは実際に自分たちの身に「何か」が起こるまで何もせずただゆであがっているだけなのか。「政治リテラシー」の獲得が、今の日本の無関心という最初の「危機」を救うのである。

今回の授業では「政治リテラシー」の獲得について学んだ。

政治リテラシーとは政治に対する関心・知識・行動力であり、危機をいかに敏感に知り、果敢に行動できるかはその有無による。リテラシーを身につけるには「強大国家権力性悪説」の認識である。政治は人間がするものであり、権力が不適切に使われることが常にあるという念頭を置いておかなければならない。

権力が暴走しないためにも、民主主義と政府の行動を縛ることが必要である。しかし、低投票率やメディアの規制自由の低下、秘密保護法、安保法制など、必要なものが危機的状況にあるということを講義で知った。

私は、生まれた時から民主主義が当たり前の世の中を生きてきたので、民主主義が危機にある、などということはこの講義を受けるまで思いもしなかった。しかし、今回の講義で、現在の日本の民主主義・立憲主義が揺らぎつつあるのが分かり、高校の時に選挙の大切さや政治への関心が必要と言われてきた意味をやっと本当に理解することが出来た。戦争と災害の被害を一緒くたにしている文章に何も思わなかった人がほとんどであったことから、

例外もいるが、私達若者は政治リテラシーが不十分である。政治への無関心は自分の身に跳ね返ってくることになるので、自分の将来のために、政治リテラシーを高め、現状を把握し、行動できるようにしなければならない。

今回の総合科学入門講座では民主主義についてを学んだ。民主主義国家では選挙で容易に政権が交代できるため、賢明な有権者、報道の自由と知る権利が必須であることが分かった。私は過去に選挙に行ったことがあったが、ほとんど候補者の政策を調べずに投票したため、自分の意見を反映できていなかった。国民として自分の意見を正確に反映させるために日本の政治について関心を持ち、ニュースなどの報道で情報を得る必要がある。

また、今回の授業では安倍政権の憲法解釈について取り上げられていたが、私は講義の内容とは反対の意見である。憲法ができたのは、何十年も前のことで現在の社会は変化しているため、憲法の解釈の変化も必要なことである。今社会は国際化が進み各国だけの問題では済まないことが多く、他国の戦争も日本に大きく影響を与えるために集団的自衛権のある憲法解釈は正しい。例えば外国にいる日本人が被害を受けたときに、集団的自衛権

コメント [y50]: 安倍政権の判断が国際情勢への対応として妥当かどうかということ、その判断が憲法に違反しているか否かということは、論理的に別のことです。

コメント [U51]: そうです、論点は別なんです。この辺の話は「国際政治学入門」で詳しく説明します。あるいは直接研究室に来てください、いくらでも説明します。

があれば日本は積極的な援助ができる。よって、安倍政権の憲法解釈は立憲主義の否定とはいえない。

今日の饗場先生の授業で、政治についての講義を聞きました。政治に関心を持つ人が日本では極度に少なく、ほとんどの人が政治に対して諦めの気持ちを持っていることも事実です。なぜなら、内閣をはじめとした国の力が強すぎて帰るのが不可能に近くなっているからです。だからと言って自分たちがなにもしなければ、なにも変わらないのも事実です。その上で自分たちに言えることは正確な情報を一生懸命取りにいかなければならないということです。新聞社によっても意見の違いが出てくるので、読み比べをしてみるのも1つの手だと思います。このようにして、私なりに努力を続けていきたいです。

今回の講義の目的は立憲民主主義の仕組みを理解することであった。民主主義の仕組みにおいて、根拠に基づく合理的な考え方や、他者と対話し、合意形成する能力は不可欠である。また、これが欠けてしまうとナチスドイツで行われた大量虐殺のような悲劇を生むことに繋がる。

饗場先生による「ゆでガエル」の例えを用いた説明は明確で分かりやすく、そうならないためにも政治リテラシーの獲得が必要であると感じた。

講義の中での「政治や宗教には関わらない方が良いか」という質問に多くの学生は関わらない方が良いと答えた。しかし、特に政治には関わらざるべきである。また、私たち一般市民が政治に参加できるのは、国民投票などだが、投票には必ず行くべきである。なぜなら、投票に行かないということは、日本や世界の未来を変えてしまうような法案に一票を投じると同じだからである。最近の国会では、国会議員の私的な問題に関する論争が殆どで、メディアでも多く取り上げられている。しかし、そういった問題ではなく、日本の行政に目を向け、政治に参加していくことが重要である。

国家権力の違和感のある行いに気がつくことができる力は、どのような時代であっても非常に大事な能力である。そのため、選挙権を与えられた私たちは特に、政治に関する情報に真剣に向き合い、自ら調べていく姿勢が重要であるだろう。

今回の講義では一貫して反安倍政権の立場で話が進んだが、**一つの立場の意見だけを聞いて納得してしまうのは安直である**。それは、自分達の立場にとって都合のいい解釈ばかりを並べている危険があるからである。しかし、人を納得させようとした時にそうなってしまうのは仕方のないことかもしれない。ゆえに、様々な立場からの意見を聞くことや、メディア各社の報道の見比べなどを通して真実を見極め、自分の立場、意見を形成する事

が大切だろう。

今回の講義では政治リテラシーについて学んだ。政治リテラシーとは政治に関する知識、関心、行動力のことである。総合科学部では根拠に基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し合意を形成する能力が求められているが、これは政治においても必要不可欠だ。そのためには政治リテラシーを獲得する必要がある。ここで講義ではイラクやシリアの戦争の映像を見た。国家が権力を乱用し、戦争に関係の無いたくさんの人が命を落としていた。その中には子どももいた。たくさんの人が泣いていた。国家が悪くなったときにはその国家は変えていかないといけない。そのために国民は有権者であり、知る権利を持っている。しかし現在、投票率の低下、秘密保護法、共謀罪など問題が出てきている。また、国家を縛るために憲法がある。しかしその憲法も今、安保法制で憲法を軽視している。国家によって市民が被害にあわないためには民主主義と立憲主義の仕組みの確立と維持が大切だ。

私はこれまで政治に対して興味、関心が全くなかった。なぜなら、政治と聞くと悪いもの、面倒なものという先入観を持っていたからだ。しかし、この講義で戦争の映像を見て他人事としては見ていられなかった。国家を放置しておくとならぬ国の混乱を引き起こすことになる。そのようなことにならないために私たちには選挙権や知る権利が与えられている。だからまず私たちに出来ることとして、選挙には参加するべきだ。若者の投票率の低下が問題となっている今、このような政治の問題についての講義を受けて改めてこの問題について考えることができた。

今回の授業では政治リテラシーや国家、災害についての話を聞きました。まず、災害には天災と人災の二種類があり天災は自然の災害であるのである程度仕方がないことだが人災は防げるといことがわかりました。次に、政治を行う上で利害がぶつかった時に解決の方法として案を作ってから、その案を通す工夫をするという方法があること、国家の権力濫用を防ぐために悪い政府は選挙という仕組みを利用して変える、憲法によって政府の行動を縛ることがあることがわかった。しかし、最近投票率の低下が見られ政府を変える仕組みをうまくやるようできなくなっている。もっともひどい人災である国家が加害者になって国家権力によってもたらされる人災を防ぐためにも選挙権を持った今自分もしっかりと選挙に参加する必要がある。また、日本の現状について理解を深めなければならない。

今回の授業は民主主義についてだった。私たちは民主主義の中で生きる上で「政治リテラシー」を獲得する必要がある。そして危機を敏感に知り、いかに果敢に行動できるかが求められる。

まず政治リテラシーの前提条件が理解できているかを知るためにクイズを行なった。沖縄にある兵庫県知事の書いた文章が彫ってある石碑だったが不自然な点があった。阪神淡路大震災と沖縄戦を同じに扱っていたのだ。前者は人の力が及ばない天災であり、後者は人が引き起こした人災である。人災は人間が招いた事態であり、避けようがあるので天災とは違うのである。

政治とはなにか。この問いに私はうまく答えられなかった。自分一人だけの世界なら政治は必要ない。政治は複数の人があると互いの利害がぶつかるため、その利害を調整・解決するためにある。その政治には価値の配分と権力が必要である。

ではその政治とは誰が行うのだろうか。それは政府である。その政府にいるのも同じ人間である。よって失敗することもある。国家権力は暴走すると大変なことになる。例えば殺人だと個人が行うと2桁だが国家が行うと7・8桁になる。

もし暴走してしまった場合私たちが取れる手段は2つある。1つは悪い政府を変えることである。これは民主主義の手法にそって選挙で平和的に変えるという方法である。しかし、投票率が低下しているので今危機に瀕している。2つ目は政府の行動を憲法によって縛るという方法である。この仕組みを立憲主義というがこちらも今安保法制などにより危機になっている。

授業の中では共謀罪についても触れられ、講演会が行われることも聞いた。今回の授業でわかったことだが私たちは政治や宗教に関わることを避けるのが当たり前になっていて気づかないほどになっている。宗教はそのままでもいいと思ったが政治に関しては危機感を持って講演会などの場に積極的に参加していくことが必要である。しかしその際に公平性を保つため、内容を鵜呑みにせず、**自分の頭で考え判断することが大切である。**

コメント [y52]: 「考える」とは、「調べ、知り、書き、書き直す」ことですね。

今回の総合科学入門講座では「民主主義論」についての講義を受けた。授業の内容のまとめとしては、民主主義をめぐる最も基本の観点は「政治リテラシー」の獲得であり、この「政治リテラシー」を持つことで危機を敏感に知り、果敢に行動できるということ、「政治リテラシー」の獲得には「強大国家権力性悪観」という前提の認識が必要であること、最もひどい人災は国家が加害者となり国家権力によってもたらされる人災であること、市民がひどい被害に遭わないためには民主主義(政治を変える)と立憲主義(政治を縛る)の仕組みの確立・維持が必要であることを学んだ。

私も含め多くの大学生が日常的に政治に関する話をするのではなく、政治に対する関心も低いのが現実である。今までは選挙権がなかったため、自分の意見を政治に反映させることは難しかったが、現在は選挙権年齢が18歳に引き下げられ全ての大学生に選挙権が与えられている。そのため、今までと同様に、政治に対して無知のままでは許されなくなり、現在の日本の政治の動向をきちんと理解しておかなくてはならない。私は授業中に出てきた「共謀罪」「安保法制」「秘密保護法」等の言葉について聞いたことはあったが、具体的

にそれらのどのような点が問題であるのかを理解しきれていなかった。しかし、このような政治的無関心のままでは国家権力が濫用され、私たちの安全な生活は確保されなくなる。今回の講義を通して、今まで憲法とは国家が国民を統制するものだと考えていたが、その考えは誤りであり、憲法とは政府・国家の行動を縛る規制・ルールのことであると分かった。また、このように誤解をしかねないほど現在の国家は猛獣自身が檻を壊している状態に近づいている。したがって、まずは私たちが現在の政治に対して正確に理解をし、それを踏まえた上で民主主義と立憲主義の確立・維持のため、選挙へ行き自らの意見をきちんと反映させることが重要である。

民主主義と聞くと、自分のイメージとしては選挙で議員を選出して、我々の代表として意見を述べてもらったりすることだと思っていました。しかし、選挙で議員を選ぶことだけが民主主義ではないと、当たり前のことといわれればそうなのですが知識がないため今までそう思っていました。

講義で、イラク、そして東日本大震災の映像を見てテレビでは報道されない現実を目の当たりにして衝撃を受けました。テレビで報道するにはあまりに衝撃すぎる内容だったのでしょうか。でもあれが現実なんですね。天災は避けようがない。でも人災はいくらでも避けようがある。今でもニュースを見ていると、北朝鮮のミサイルであったり、テロなどの報道が後を絶ちません。世界平和を目指しましょうとよく言われますが、**平和とは何なんでしょうか**。戦争が無くなればいいのか。皆が幸せになればいいのか、平和の定義は難しいです。

コメント [U53]: 2年生以上の授業ですが「平和学」を後期に開講します。

今回の授業では天災と人災について学んだ。日本に住んでいる以上地震などからは避けることはできない。過去に日本でも大きな地震が起きてきた。

阪神淡路大震災や東日本大震災などか起きていた。僕が住んでいる徳島にも大きな地震が起きる可能性がありそれに備える必要はある。

しかしそれ以上に脅威なのは人災だ。ナチスドイツのヒトラーなどはその典型的な例である。人 1 人が人を殺しても国を破滅に追い込むような被害はでないが国家が悪い仕打ちをすれば何百万もの人が殺される可能性もある。

そのために僕たちはもっと政治に目を向け二度とナチスドイツのような悲劇を起さないうようにする必要がある。

今回の授業は民主主義についての話だった。政治リテラシーの必要性を映像を見て本当に感じた。国家権力の暴走があのような悲惨な出来事を起こしてしまったというのを考え

ると政治に無関心なのは大変危険なことだ。にもかかわらず、政治に関心がないから投票率が下がってきている。自分が国の政治に何ができるのかを考えると、やはり自分の意見を投票という形で表すことだと思う。改めて政治に関心を持つことの大切さに気付かされた授業だった。

今回の授業では、「立憲民主主義」についての話を聞いた。最初に、政治リテラシーを持つことの必要性についての話をきいた。確かに友人や親と政治についての話をした覚えはあまりない。選挙法がかわり 18 歳から投票することが可能にはなったが、普段政治のことに関する関心が少ない人が周りには多いと感じる。私もたまたまニュースで見かける程度のことしか政治については知らない。「ゆでガエル」のたとえ話を聞いて、いつまでも他人事として政治関係のことを捉えていれば自分自身が困ることになると再認識した。

他に、戦争についての映像と、震災についての映像を見せてもらいながら両者の違いについて聞いた。この話では、国家権力の強大さと濫用されることの恐ろしさを知った。結婚式という幸福な場でたくさんの死者が出て、ろくに謝罪もなかっただろうことはとてもひどいことだと思う。中々衝撃的な映像も多かったが、深刻な問題として捉えることができたのでよかった。

「共謀罪」の採決が今、とても話題になっている。反対意見者のデモ活動も行われていて今後どうなるのかとても気になっている。自分でも少し調べてはみたが少し難しい。もっと詳しく調べてみようと思う。

今回の授業では政治リテラシーについて学んだ。政治リテラシーとは、政治に関する関心、知識、行動力のことである。政治リテラシーがあれば、危機が起こったときに敏感に知り、果敢に行動できる。

また、人災と天災の違いについても学んだ。人災は身近に起こったりしていなかったのでもあまり想像できなかったが、映像を見て国家権力の強大さや国家権力の濫用可能性を知った。もし悪い政府になったならば自分たちで変えなくてはならない。その近道は、やはり積極的な選挙投票である。選挙権が与えられる年齢が引き下げられた理由には、このような強大国家権力が関係しているだろう。引き下げられたのには引き下げられた理由があるのだ。それだけ危機だということだろうか。私たちは自分を守るためにも政治リテラシーをしっかり獲得して、自分には関係ないと思わずにまず選挙に行くべきだ。

今回の講義の内容は民主主義についてだ。政治とは複数の人がいる社会における利害の調整・解決をする。しかし、政治は政府が行い、国家としては人間が行う。国家権力を握

る人間が、無能だったり邪悪だったりするかもしれない。そして、市民をひどい目に合わせる可能性がある。市民が被害に遭わないためには二つの方法があるが、どちらも今危機である。その一つ目は民主主義だ。民主主義は選挙で平和的に政府を変えることができる。そのためには政治に関心を持たなくてはならないが、今は低投票率である。そして、我々の政治についての判断基準であるメディアが衰退してきている。二つ目は憲法だ。憲法は我々が強大な国家権力である国家・政府を縛る。しかし政府は憲法を軽視し、我々の行動を規制しようとしている。これは、強大な国家権力を自由にさせるものだ。

我々は、国家権力が市民に被害を与える可能性を認識し、最もひどい人災は国家権力にもたらせる人災だと分かなければならない。話だけではなく映像を見ることで想像しやすくなる。政治に対して関心を持ち、事前に危機を認識し、行動することが重要だ。そうでなければ、何もできないまま危険に巻き込まれる。

共謀罪の法案が強行採決されました。なぜ与党は共謀罪の法案をを成立させたかったのですか。

今回の講義では、政治リテラシーについての講義だった。政治には性悪説によっているということを忘れずに、国家権力の暴走を牽制しなければならない。そのためには民主主義、立憲主義の確率、維持が大切である。このことが成り立たないと、戦時中のナチスドイツが行なったような惨劇が起こりうる。そして、このような人災による惨劇を決して起こしてはならない。

去年の選挙法改正により選挙年齢の引き下げが行われ、今までよりもさらに若い人たちが政治に参加できるようになった。それにも関わらず、若者の選挙率は一向に向上していない。現在の国会ではしきりに共謀罪や、憲法 9 条改正案などをめぐり議論がなされている。これらの議題は今回の講義で紹介されたような国家権力の暴走による人災を招かないとも限らない内容のものだ。今は大丈夫でも、与党が変わり、国の代表が変わってしまうと防衛のための憲法を、戦争のための憲法へと変化させてしまう可能性だってあるのだ。私たちはリテラシー云々以前にもっと政治、現代の世界に興味を持ち、目を向け、関わっていく必要がある。

今回の授業では民主主義論について取り扱った。

近年、若者の政治離れが問題となっている。私自身、昨年の選挙には投票に行かなかった。理由としては、浪人生だったということもあるがめんどくさかったというのが大きいのも事実だ。そんな私たちが、危機を敏感に察知し果敢に行動するようになるにはやはり今回学んだ「政治リテラシー」を身につけなければならないだろう。その具体的案として、毎日新聞を読む、ニュースを聞く等のことが考えられるが、それをそのまま受け入れるだけというの

コメント [U54]: テロ対策やパレルモ条約加入のためと説明しますが、あまり合理的な説得力はありません。では、本音はなんなんでしょうか…。

は「ゆでガエル」と変わらないだろう。「ゆでガエル」を回避するには日々の政治的ニュースに対し、自分の意見を持つことや他社の意見を取り入れ自分の意見と比較することが大事になってくるはずだ。また大学生という自分のしたいことが人生で一番できるといっても過言ではない時期を生かし、政治に関する過去の文献を読んだり、国や周辺の国々の歴史に精通することが、今後社会を担うことになる私たちに求められているのではないだろうか？

今回の授業では、政治リテラシーの獲得について学んだ。政治リテラシーとは、政治に関心、知識、行動力のことである。そして、政治リテラシーを獲得するには、強大国家権力性悪観という認識の前提が必要である。政治を行なっているのは、神様ではない、不完全な人間である。だから、政府は悪に走る可能性もなきにしもあらずなのだ。よって、国家権力の濫用が起こらないように民主主義活動や憲法での縛りが必要である。私は今日話を聞いて、選挙の大切さを学んだ。昨年夏の参院選から18歳以上が投票できるようになり、私も選挙権を持っていたが、投票には行かなかった。だが、投票に行かないということは、政治に一切関与しないということなので、投票に行かずその結果政治が悪い方向に向かって文句の言いようがない。自分たちが知らないうちに(政治に関与しなかったために)いつの間にか日本が戦争国になっていた、という状況にならないように、特に若い世代の人々は少しでも政治に関与すべきだ。そのための選挙権年齢引き下げだったのだろう。

今回の授業では政治について学んだ。

私たち学生は日常会話の中で政治の話題が出てくることは少ない。若い世代の投票率の低さを見ても分かるように政治に関心がないのだ。授業の中で先生が「海外では学生たちが政治の話をするのは日常的なことである」とおっしゃっていたことから、海外と比べても日本の学生の政治に対する意識の低さがうかがえる。私自身、政治的な問題をニュースで見るとはあってもそれ以上に知ろうとして国会の中継を見るようなことはしない。それゆえに、今日の授業の中で取り上げられた日本の現状に今まで以上に危機感を覚えた。民主主義を揺るがす要因としての低投票率、メディアの衰退、秘密保護法はよく耳にする言葉であったが、共謀罪は初めて耳にする言葉であった。ニュースの説明では、実際に犯罪を実行していなくても相談、計画した時点で共謀罪にあたるという。政府はテロ対策の法案であるとしているが、無実の罪を増やしてしまうのではないか。実際に実行していない犯罪を犯罪といえるのか。私たちは強く政府に監視されるのではないか。こうした危機があるにも関わらず、無関心でいてよいのか。共謀罪は強行採決されてしまったが、安全保障関連法案等強行採決されてきた法案は過去にも多数ある。私たちはこの強行採決に関して、何か抵抗する手段はないのか。今の安倍政権まで、日本は短命な政権が続いた。それらの弱く短命な政権に比べれば、安倍政権は金融緩和等の政策を実現してきている点で

評価できる。しかし、安倍政権のすべてを認められるわけではない。私たちが監視される社会がつくられようとしている今、現状を把握し、納得できない法案に対しては反対の意思を示さなければならない。

今回の授業では、民主主義について学びました。正直、民主主義とはどのようなものかよく分かっていませんでした。授業の中での、「人災と天災を同じように考えてしまってはいけない」という饗場先生の言葉が、とても印象に残っています。記念碑を見たときに、私は何も違和感を感じませんでした。しかし、戦争によって起きた被害と災害によって起きた被害のビデオを見て、はっとさせられました。どちらも起こってほしくないことだけど、人の手によって引き起こされる被害は、防ぐことができます。根本的な発生要因が違うのに、人災と天災を一纏めにしてしまってはいけないと強く思いました。

今日の授業は、民主主義についての内容だった。授業の中で戦争や災害などの悲惨な映像を見た。死体の山や爆撃で亡くなった人々を見るのはとても辛かった。国家が不適切に権力を行使することによって罪のない人が殺されてしまうのはあってはならないことである。

日本は憲法 9 条によって戦争を放棄するというにはなっているが、今政府では憲法解釈を変えて、集団的自衛権を行使できるようにしようとしている。政府を縛るための憲法が国民を縛るものになってきていると授業で言っていた。他国が攻撃された時に日本が反撃してしまったら日本も戦争に参加したことになってしまうのではないだろうか。政府は国民が納得するように詳しく説明したり、情報を公開するべきである。

私達大学生を含め、若者の政治への興味・関心、知識などつまり政治リテラシーが低下傾向にある。これは民主主義を貫き、憲法を守る日本においては大きな問題であり、このまま政治リテラシーが低下し続ければ、日本は立憲民主主義が成り立たない国になってしまう。

もともと政治には価値の分配と権力が必要である。民主主義でない国には権力が完全に一人の独裁者によって握られ、濫用を可能とし、巨大国家権力性悪観がかつてはあった。その例として、ドイツのナチスヒトラーが挙げられる。彼はかつて、民主主義の投票のもとドイツのトップに選ばれた。その後彼は巨大な権力を使い、自分の思い通りに国の方針を決めていった。しかし、彼に反対をしたドイツ人はそれほど多くなく、ついにはユダヤ人に対するホロコーストを行うという悲劇にまで至ってしまった。

このような悲劇を少しでも減らすために立憲民主主義が存在している。民主主義は政権

を交代できる点から、悪い政府を変えることが可能である。また、憲法は簡単に変えることができないうえ、すべての国民に適用されるため政府の行動を縛ることが可能である。しかし、近年では投票率の低下や大幅な憲法改正が問題視され、立憲民主主義の機能はたしていない状態になりつつある。これからの日本を立て直すにはやはり、私達若者世代の意見が必要となってくる。私は今思うと、若者が政治に意見を言うことができる機会が少ないと感じていた。これからの日本を担う存在として、もっと意見を反映できるような**場**を増やすためにはやはり政治リテラシーの向上は欠かせない事項である。

今回の授業では、饗場先生のお話を聞いた。政治リテラシーという言葉は、恥ずかしながらこの講義で初めて耳にした。この政治リテラシーを自身に身につけることはとても大事だと言える。これを身につけるためには、国家権力が常に正しいとは考えないことが大切であり、良くない部分を持っていることを意識することが大事である。そして、駄目な部分があれば、自分の意見をきちんと発信することも大切だといえる。他には、人災と天災の違いや一緒にすべきではないことも学んだ。確かに、違いを答えろと言われれば言うことができるかもしれないが、石碑に書かれた文章を読んだ時には違和感がなかった。もっと、人災の恐ろしさや非道さを意識していけば、より良い世界になっていくだろう。

今回の授業は民主主義論についてだった。まず政治に対する関心、知識、行動力である政治リテラシーを身につけるうえで必要なことは強大国家権力性悪観を認識することだと学んだ。次に戦争の映像と東日本大震災の被害の映像をみた。この二つの映像の違いは天災か人災かで、この二つの映像を一緒にくたに捉えてしまうと加害の主体が何かわからなくなってしまう。加害の主体とは国家が加害者となり国家権力によってもたらされる人災であり、市民がひどい被害に遭わないためには、民主主義と立憲主義の仕組みの確立と維持ということを学んだ。今回の先生の話聞いて改めて国民は選挙に積極的に参加するべきだ。なぜならば選挙権を持つ国民が、自分の意思を持ち投票することで民主主義は成り立つ。しかし現在の日本ではどの年代も投票率が右肩下がりになっており、20代、30代、40代においては投票率が50%を切っており、このままでは民主主義とは言えない。ではなぜ若者の投票率が低いのだろうか。理由の一つに、県外の大学や会社に就職したため投票に行きにくいというのが挙げられるだろうが、一番の理由は自分には政治はわからないし、関係ないと思い投票をしない人が多くいるからではないだろうか。確かに政治は難しいが、これからの私たちの生活を左右するものであるから積極的に新聞やニュースを見たり、1日に一回でもいいから政治についてのニュースを携帯やパソコンで調べたりすることで、私たちは政治について関心を寄せていくべきだ。選挙権も18歳に下がり私も投票できるようになったから積極的に政治に参加し、これからは友達とふとした時に政治の話ができるよ

うになりたい。

今回の講義は民主主義についてであった。講義を受ける前、私は自分はある程度政治情勢や社会動向に対して関心を持ち知識を持っていると自負していたが、今回まだ自分も「ゆでガエル」になりうると思い知らされた。

シリア、イラクの爆撃と東日本大震災の映像を見てニュースや教科書にはないより現実的で悲惨な状況に驚くとともに、人災という「国家権力の暴走」の恐ろしさを感じた。

また、国家権力性悪観に対して私は悪いのはヒトラーや軍部上層部であって国家機能はあくまで手段では無いのかと疑問を持った。

コメント [y55]: 疑問の意味がよく分かりません。

政治と宗教には関わらない方が無難とはおもわずに、関心をもっていきたいです。今までは、自分は政治に興味を持ったところで、なんにもならないと思っていました。実際それはそうだと思います。偉い人にならないと不可能だと思います。ですが、それでは「ゆでガエル」状態になってしまうと教えてもらいました。政治が歪んでいくのに気づかず、どうにもならないことに発展してしまう。そうならないためぬ関心を持っていきたいとおもいました。

授業で悲惨な映像を見て胸が痛んだ。テレビでは見ることのない光景であった。

特にユダヤ人の死体をゴミの様に処理している映像は見るのが辛かった。

東日本大震災は記憶に新しく私もよく覚えている。津波により大きな被害を出した。天災は人間の力では叶わない。対策をすることしかできない。しかし、人災は防ぐことは不可能では無いと思う。現在、世界中で戦争やテロなどが発生している。それを防ぐためには政治の見直しが必要である。

コメント [y56]: 具体的にどこをどのように見直すのですか？

立憲民主主義・政治リテラシーの必要性について学んだ。政治リテラシーとは、政治に対する興味・関心、知識、行動力のことをいう。権力を握る国家が暴走すると私たち国民は、ゆでガエル状態になってしまうことが分かった。ゆでガエルにならないようにするためには、危機を敏感に知り、果敢に行動することが大事である。複数の人間がいると利害がぶつかってしまう。それをまとめるのが政治であり政治家の役目である。価値の配分と権力が必要不可欠になる。国家権力が暴走しないためのいわば檻の役目を果たしている憲法を国家権力を行使する側が変えようとしている現状に危機感を覚えざるを得なかった。今まで何もわからないままほったらかしにしていたことを後悔した。あのような悲惨なことが

繰り返されないように政治について知っていききたい。

今回の授業では、民主主義について学んだ。民主主義とは、「人民が主権を持ち、人民の意思をもとにして政治を行なう主義」(新明解国語辞典)とある。しかし、国民が主権を持って選んだにも関わらず、結果的に民主主義な政治とならなかったことがあった。そんな独裁政治の例として、今回はナチスやヒトラーについてのビデオを見た。内容は衝撃的であり好ましいものではなかったが、負の歴史を学ぶ上で重要なことだ。このようなことを繰り返すことのないように、歴史をしっかり学んで、民主主義について考えていかなければならない。

今回の講義を終えて、国民が政治へ関わるのが、どういうことなのかを再認識するとともに、私の政治への関心は高まった。

民主主義国家における憲法は、国家権力を縛り、国民が政治の主体となるためにある程度の自由を保障するものだ。憲法が国家権力に屈しない理由は、講義中の映像資料にもあったように、国家の力が大きすぎるため悪政へと転がった先の始末ができなくなることが恐れられているからだと言える。第二次世界大戦の時、日本政府は情報操作によって真実を捻じ曲げ、国民の戦争への取り組みを大きく向上させた。その結果、兵士へとなりたがらない子のいる家へ、他の家の者が悪く言うような俗世の風潮が生まれたりもした。日本が敗戦し多くのことが明らかになり、国に騙され続けた国民は争いに手を貸した自分たちの罪に大きく悲嘆したのだろう。

民主主義は、国民が選挙などによって、主体的に政治を行う人を選抜し、関わっていく制度だ。だが、最近では多くの若者が選挙に参加せず、政治への関心も薄い。グラフデータ(www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/ritu/、5月22日現在、総務省より)を見ると、衆議院議員総選挙における20代の若者の投票率は17年間でおよそ37%も下がっている。理由は至極簡単なことで、面倒臭い一言に限る。投票場所が遠い、誰に投票すべきかわからない(知ろうとしない)など、深く掘り下げればいくらでも出てくる。

カッコで括って書いているが、知ろうとしないから、政治への関心は湧かないのだ。今の世は、情報が溢れている。リテラシーが求められるけれども、インターネット、テレビを見れば、地元あるいは国の政治の動きや選挙活動の内容も、立候補者の意も、大抵は見られる。

知ろうともせず面倒臭がっている若者に知る事の大切さを説きたい。

若者の投票率が低いためシルバー民主主義となってしまっている現状は、私達若者にと

コメント [U57]: 投票自体はものの数分。投票所も大学内にあります(期日前投票ですが)。

ってあまりにも損だ。奨学金などの問題が直接関わってくるだろう。

政治は私達と無関係ではない。しかし、何も考えず、ただ周りに流された意見を持つだけでは不十分だ。民主主義という体制を維持していく、賢明な有権者であるためにも、社会から情報を手に入れ適切に処理していく能力を養う必要がある。主権者である自覚と責任を忘れてはいけない。

今回の総合科学入門ではグロテスクな映像を見ました。それは人災です。ある地域で結婚式が行われており、そこであげられた祝砲を米軍が攻撃と勘違いして米軍が攻撃を開始し、幼い子供を含めたおよそ 26 人もの尊い命が奪われていったという映像でした。頭が吹き飛んでなくなっている子もいました。私は実際にあのような映像をモザイクなしで見たのは初めてだったので思わず目を手で覆ってしまった場面もありました。また、沖縄県にある兵庫県知事からの記念碑に人災と天災を同じような目でみている文章がありました。最初に何か違和感あるかと言われた際にこの部分に違和感を覚えました。しかし、この文章に対して違和感があるところを見つけよと言われていなければ私はその部分に全く気にも止めていなかったと思います。今回の講義を受けて政治にもっと関心を持ち、もし政府が悪い方向に進んでいたならば若い世代である私たちが声を出して変えていかなければならないのだと感じました。ヒトラーの政治のようになんでもかんでも言いなりにならず自分で考えていくことが大切だと思いました。

コメント [y58]: 「考える」とは、「調べ、知り、書き、書き直す」ことですね。

今回の講義では、講座の目的である政治リテラシーの獲得、合理的な考えを持ち、他者との対話で合意を形成するために必要なことを学んだ。

講義の話の中で政治や、選挙などの話もあったが、その中で選挙の投票率の話には少し疑問が残った。よく若年層の政治無関心が問題視されているが、高齢化率が上がっている現状で政治も高齢者向けであり、その中で若者の意見が反映されるとは思えない。また、若者に投票をするべきだと説いている人の時代は、今よりも比較的若年層の意見が通りやすかったはずである。そのような時代の人が作った現在の日本には多くの問題が山積しているが、それを作った時代の人に投票を、投票を、と言われても道理を外れているのではないかと考えざるを得ない。

コメント [y59]: どういう意味？
それから、ではどうすればよいのですか？

今回の授業は饗場先生の民主主義についてでした。結婚式中に爆撃を受け大勢の遺体が運ばれている映像やナチスドイツによる大量虐殺の映像を見て心臓が痛かったです。ナチスドイツの映像中に流れたナレーションの「こういうことがどこでも起こりうるのです」という言葉に日本で絶対にこういうことが起こらないという確信はないのだと思いました。

日本の政治について他の人に任せるのではなく選挙に行き自分も積極的に参加しなければいけないのだなと思いました。

今回の授業では政治に関心を持ち、危機をいかに敏感に知り、いかに果敢に行動できるかが重要だということを学んだ。つまり、政治リテラシーを身に付けることが大切であるということだ。また、天災による被害と人災による被害を区別しなければならないことや、政府はもともと悪いものと考え選挙での働きかけが必要ということも学んだ。

私は今回の授業を聞いて、改めて選挙に行くべきだと考えた。映像にもあったように、独裁国家の独裁者が暴走すればたくさんの人命が絶たれる。なぜ暴走を止められなかったかという、独裁の下では意見すら許されないからだ。一方、民主主義では選挙という形で政治方針を国民が決められる。そこで、授業でもあったように民主主義を維持しなければならない。しかしながら、毎年投票率は低く、特に若者が投票に行かないという現状だ。ましてや、アメリカの大統領選挙の方が興味津々である。このように民主主義でありながら国家に働きかけることが出来ていないので、まずは選挙に行くことから始め、政治リテラシーを徐々に身に付けていかなければならない。

「政治リテラシーの獲得」

普段、私たちは生協で食事しながら政治が話題にあがることはあまりない。私は宗教と関わるつもりは毛頭ないが、政治に対する関心は徳大生の中ではある方だと自負している。まず政治リテラシーの獲得以前に、学生はニュースに関心を持つことから始めなければならない。親元を離れ、下宿している大学生は、新聞を読む機会が極端に減り、スマホで少しだけ見る程度にとどまっている。食事の場に政治の話題があがらないのは、単に政治が今どうなっているのか知らないからではないか。または、日本人全体が平和ボケしていて、自分の政治への無関心が、後々自分に直接不利益を被ることになるのを自覚していないからではないか。私は毎朝起きて、目を覚ますためにも ZIP!を見ていて、最新のニュースを仕入れると同時に天気もチェックするようにしている。

そして、政治とは神様が行うものではなく、人が行うものである以上、国家権力という猛獣がきちんと檻の中にいるか監視しなければならない。その大前提である、民主主義と憲法はこれからもずっと守られなければならない。メディアの報道の自由度の衰退は、今の私たちには、どうすることもできないとしても、きちんと世の中のことを理解して、日本全国の学生を始め、若者全員が選挙に行くだけで、国家権力の暴走は抑えられる。一人一人が政治を知り、自分の意見を持ち、行動すること、これが政治リテラシーである。

現代社会において、危機をいかに敏感に知り、いかに果断に行動できるかが重要である。そのためには、政治リテラシーが必要である。

そんな政治リテラシーには前提の認識が必要である。その認識とは、強大国家権力性悪説のことである。例えば、現代社会において、最もひどい人災とは何だろうか。それは、アメリカ軍が他国で誤爆を起こしたことなど、国家が加害者となり国家権力によってもたらされる人災である。それらを踏まえると、強大国家権力性悪説がいかに大切な認識かわかる。

そのような社会の中で、市民が被害に遭わないためには、民主主義と立憲主義の仕組みの確立と維持が必要である。民主主義には政府を変える力があり、立憲主義には政府を縛る力があるからである。

最近の若者の選挙などでの投票率は低い傾向にあるが、これはいち早く改善するべきだ。なぜなら、国民の意思があるからこそ政府の強大な権力を抑えることができるのに、国民の意思が反映されなかったり弱まってしまうと、権力者の勢いが強くなり戦前のように独裁的な政治が始まるかもしれないからだ。

今回の総合科学入門講座では普段私たちがあまり興味を持っていない政治に関することを教えていただいた。過去に起きたナチスのユダヤ人虐殺についての動画を見て、このような事が2度と起こらないようにするには1人1人が政治リテラシーを獲得する必要があると教わった。そのためにも普段からニュースや新聞に関心を持たなければと感じた。

今回の授業では、政治リテラシー会得のための発想や知識を映像を通して学んだ。授業中に私たちが見た映像は非常にショッキングであった。そのときに「かわいそう」という考えを持ってはならない。「かわいそう」という言葉を使うときは「自分に関係無い」と、他人事として捉えているからだ。今、北朝鮮のミサイル問題の渦中に日本が巻き込まれている中で、世界で起きている政治や宗教の争いに「自分に関係無い」とは言えない。

まずは、対立し合っている両方の立場や言い分を知り、自分のこととして捉えることが必要である。

今回は政治リテラシーについての話だった。

ドイツの過去の独裁政権や、イラク戦争など、人災による大きな被害を動画で見ることができ、それは今の日本にも起こりうる事態であるということだ。

そもそも憲法は市民が国家権力の濫用を防ぐためのものであり、現在の日本の憲法は、市民を統制する方向へと改正が始められていることに同意する。

今日を以て可決された共謀罪についても国の裁量でその人の思想などを取り締まる事が可能となりうるため、国家権力の濫用に触れると私は考える。

シリアやイラクにおける戦争の被害と東日本大震災の被害の徹底的違いは人災か天災かである。沖縄の記念碑のように人災と天災を一緒にしてしまうと、加害の主体は何か、それへの対策は何かを見失ってしまう。最もひどい人災は国家が加害者になり国家権力によってもたらされる人災である。被害にあわないために強大国家権力性悪観を頭に入れ、政治リテラシーを身につけ、民主主義と立憲主義の仕組みの維持しなければならない。

今回の授業では、政治リテラシーの必要性についての話があった。授業の要点は大きく分けて3つある。

まず1つ目は、政治リテラシーを獲得するために必要な前提の認識とは、強大国家権力性悪説の考えである。天災ならやむを得ないため避けようがないが、戦争などの人災は人が招いたものであり避けようがある。しかし、国家を善であると捉えていては、ナチスドイツが行ったユダヤ人の迫害や収容所のような悲惨なことを招いてしまう。そのため、国家権力の強大で、権力が濫用される可能性があるというように国家を性悪説として捉える必要がある。

2つ目は、最もひどい人災をもたらす加害の主体についてである。加害者は国家であり、国家権力によってもたらされる人災が最もひどいものである。

3つ目は、人災による被害にあわないためにどうすれば良いかである。民主主義(政府を変える)と立憲主義(政府の行動を縛る)の仕組みの確立・維持することが必要である。

授業で見た映像はとても悲惨であった。イラク戦争の映像を見たとき、あれを人間が行ったのかと考えると恐ろしい。また、ドイツの収容所のような残虐な行為がこの先起こらないとも限らない。現在の内閣で集団的自衛権の行使が認められたため、日本が戦争に参加することになる日もそう遠くはないのでないだろうか。私はあまり政治について真剣に考える時間を作っていないが、この授業を機に、現在の政府が行おうとしている政策や憲法改正についてなどよく調べよく考え、選挙があれば参加していきたい。

1 今回の授業は民主主義に関する内容だった。記念碑は人災と天災を同じものの様に扱って書かれていた為に非常に不自然に感じた。どちらも非情なものであるが、人間が関わっているのか関わっていないのかの違いは大きい。加害の主体は何かを見失ってしまうと適切な対策が行えなくなる。「強大国家権力性悪権」には驚いた。一般人が暴れても被害者は多くて二桁だが、国家が暴れるとその被害は七桁以上にのぼる。そうならない為にも憲法

で国家を縛り暴走してしまわない様にする必要がある。現在は国家ではなく国民に憲法による制限を与えているものが存在する。今一度、立憲主義について国民は理解する必要がある。「ゆでガエル」にならないように気を付けなければならない。

2 | ドーベルマンは誰彼構わず噛むわけではないかと。

3 狂暴で人をすぐに噛むイメージが強いかもしれないが、ドーベルマンはしつけさえきちんと行えば警察犬や麻薬探知犬として導入される程に非常に賢い。警戒心が強く家族以外の人間・縄張りに入ってきた他のイヌに対して攻撃的にはなるが、だからといってすぐに噛むわけではない。個人的にはあり、かなり細かいが「ん？」となった。なったのは私だけだろうが。

今回の授業では、人間は天災に対して「しょうがない」と認識するが、戦争やテロなど人災に対して避けられる。最もひどい人災は国家が加害者となり、国家権力で強制する時だ。それを防ぐために、対策は2つがある。一つ目は民主主義で選挙を経て悪い政府を変えることだ。しかし、国民の投票率が低いのはこの対策の危機だ。二つ目は憲法で政府の行動を縛ることだ。この対策のデメリットは国民が憲法に対して軽視することだ。どちらの対策の危機にも国民の政治に関心事を関連する。

政治リテラシーの獲得ために、強大国家権力性悪観という前提の認識を得るのは必要だ。被害者にならないように、政治の知識が不可欠だ。

今回の講義では、民主主義について学び、政治リテラシーを身につける必要性について学んだ。実際の米軍による誤爆の映像、地震の被害写真を見た。

同じ人間同士がなぜ傷つけ合うことに意味があるだろうか。そして力を持つ方が都合のいいように世界を動かしそのことを疑わないで過ごしている私たちも同罪であり、それを防ぐために政治リテラシーを身につける必要性を感じた。

子どものころから、この講義の内容を見せなければならないと思う。現実にも目を背けていてはならないと思う。そこから、政治リテラシーがついて行くのではないだろうか。

今回の授業では民主主義論について学んだ。戦争や地震といった加害の主体を見極め、対策を立てなければ繰り返され続けることを学んだ。民主主義では有権者たちが積極的に政治に参加しなければ、政府の行動を制限できず、結果平和が崩れてしまう。集団的自衛権は一見日本を守るための手段に感じられるが、こういった憲法解釈は立憲主義の否定につながり、民主主義の崩壊をもたらすことを学んだ。

コメント [y60]: もともと軍用犬ですから、国家権力に歯向かう者を選んでかみつくのでしょうか。

コメント [U61]: なるほど、あまりドーベルマンのこと知らずに話しました。たとえば正確でなかったかもしれませんが、意味はわかりましたか。

コメント [y62]: 人間には発達段階がありますから、何でも子供のころからやっておけばよいというものではありません。

今回の講義は非常に衝撃的なものであったと同時に目を背けてはならないものであった。日単位で世界情勢や国内情勢が目まぐるしく変化している現代で、政治に対する関心や知識、行動力である政治リテラシーは欠かせない。必ず獲得すべきもの、身につけなければならないものである。現在の日本では戦争や内戦、テロや武力衝突というものは起こっていないが、こうしている現在も中東地域では緊迫した状況が続いている。日常的に中東地域や武力衝突を身近に感じることは困難なことかもしれないが、確実に私たちが暮らす同じ地球上で激しい衝突が繰り返されているのだ。それも昔の話ではない、現在のこの瞬間の話である。そして、同じ地球上で起こっていることは地球上のどこでも発生する可能性がある。常に脅威が身近に迫っているのだ。そんな現代で政治リテラシーを持ち合わせていなければいざというときに行動できない。また、身近な問題として、自国の政治にも適切にかかわることが出来ない。自分の身の回りの環境を豊かにするためにも、また脅威にさらされないためにも政治リテラシーは不可欠なのである。

拠に基づく合理的な考えを持ち、他者と対話し合意を形成する能力は、民主主義において不可欠である。この民主主義の最も基本の観点である政治リテラシーの獲得について、今回の授業では学んだ。

政治リテラシーとは、政治に対する関心や知識、行動力のことを意味する。まず、政治リテラシーを身につける上で必要なのは、強大国家権力性悪観を前提として持つことである。政治は、価値の配分と権力のことである。よって、最も大きな人災は、国家が加害者となり国家権力によってもたらされるものである。私たちがこの人災を避けるには、民主主義(政府を変える)と立憲主義(政府を縛る)の仕組みの確立と維持をしなければならない。しかし、今この仕組みの確立と維持は危機的状況にあり、私たちは知らず知らずのうちにゆであがる蛙のような状態にある。そこで、政治リテラシーを獲得し、日本の現状の認識と行動を起こさなければならない。

ショッキングな映像が流れた。砂漠の中で遺族にすがりつき泣き叫ぶ男性に、誤爆をしたにも関わらず正当化するアメリカ。これが世界で起こっているリアル。ニュースではあまり流れないため自分から知ろうとしなければ一生知らないでおく事も出来る。しかし重要なのは饗場先生がおっしゃるように、ここで起こっているなら自分にも起こりうるということだ。他人事だから重要ではないというわけではなく人災も天災も自分のことになって初めて意識し始める。

その人災は防げるものである。今回出てきたある他国が攻撃を受けた場合、攻撃を受けていない日本が反撃に出るといった集団的自衛権に私は反対である。日本は守ってもらって

いるのにその国を守らないので国際的に弱い立場となるが、平和という点から見ると戦争が起らないように今出来ることは人災が起りうる舞台を整えないことが重要だ。"

近年、国会議員の発言や行動で多くの報道がされています。低投票率の日本だけでも当選して議員となった人が問題を起したら日本中で問題となるのはどのようなことが原因であると思いますか?

今回の授業では、政治リテラシーを身につけるために、沖縄の記念碑から問題点を見つけ、それに関する天災と人災の動画を見た。テレビでは、規制がかかっているのに、本物の死体を見る機会がなかったが、災害で亡くなった人を動画で初めて見て、衝撃が走った。複数の人がいるから利害がぶつかるため、人災が起きるといのは、悲しい現実である。しかし、多様な価値観があるため、仕方がない部分はあるが、戦争までいくとさすがにやりすぎである。言葉で解決できないから、武力で解決するというのはあまりに極端すぎる。そのようなことを避けるためには、第三者に解決してもらうのが一番良いのではないだろうか。公正に判断できる立場にある者だからこそ、冷静に判断できるだろう。

今回の講義は民主主義についてだった。国家が加害者となり国家権力によってもたらされる人災がもっとも恐ろしいものだと言った。ナチス政権による大量虐殺の悲惨な有様を映像で見た。あの悲劇を繰り返してはならないというのは言うまでもないことだが、あれを行ったのは私たちと同じ人間であるということを忘れてはいけない。賛同する人間が集まり、権力を持てばあのようなことを起こすことができちゃう、起こす可能性を持つてしまうということを証明している。何が正しくて、何が正しくないか。自分の意見を持つことなく、ただ機械的に上の言うことに従う人が増えていけば、また恐ろしい事件が起こるかもしれない。国民一人一人が政治に関心を持ち、自分なりの意見を持ち、政治に関わっていかなければならない。

オーストラリアにホームステイした際、現地の高校生の女の子が、アメリカの選挙戦を語っていたのを思い出した。自分は語るほどの興味もなければ、知識もない。政治に対する姿勢の違いを痛感した。兵庫県知事が、沖縄に戦没者慰霊碑をおくった。人災と天災を同じにみている。人災は起こさないようにする事が出来る。人災を起さないためには自分たちに政治的運用能力が必要なのだ。日本人も政治を語ることが当たり前になる必要があるのだ。

コメント [U63]: 質問の文章があいまいですが、なぜ次々問題発言をする議員が出るのか、ということですか。一つには小選挙区制の弊害によって議員の質が下がっていること。また、「安倍一強政治」のおごり、あるいは、要は、有権者に見る目がないこと。

コメント [y64]: 具体的には誰ですか？当事者たちがその「第三者」の判定を受け入れるためには、その「第三者」には権威や武力があることが必要になります（授業中の「長老 C」の話を思い出しましょう）。

今回の授業は民主主義論についてだった。民主主義論をめぐる最も基本の観点は、「政治リテラシーの獲得」であり、最近この観点の重要性が増してきている。生協で食事をしながら政治が話題に上がらなかったり、政治と宗教には関わらない方が無難と考えていたり、政治について無関心でいると、私たちは「ゆでガエル」になってしまう。「ゆでガエル」にならないためには、危機をいかに敏感に知り、いかに果敢に判断できるか。「政治リテラシー」があればこの対応ができる。「政治リテラシー」とは政治に対する関心、知識、行動力もことである。シリアやイラクにおける戦争の被害と東日本大震災の被害はどちらも惨状だが、天災か人災かという決定的な違いがある。天災ならやむを得ない。しかし、人災は誰か「やったやつ」がいる。自然ではなく人間が招いたことなので、避けようがある。また、政治が機能するには1 価値の配分 2 権力がある。映像では、砂漠で結婚式を挙げていた人たちが、ミサイルを打たれて死んでしまった映像だった。この映像から国家権力の強大さ、国家権力の乱用可能性がわかる。神様に政治をお願いできない以上、強大国家権力性悪観を前提として考えなくてはならない。ではどうするかというと、1 悪い政府は変える(=民主主義) 2 政府の行動を縛る(=憲法)という2つのことがあげられる。

まとめとして、「政治リテラシー」の獲得の必要な前提の認識とは強大国家性悪観であり、最もひどい人災は国家が加害者となり国家権力によってもたらされる人災であり、市民がひどい被害にあわないためには、民主主義(政府を変える)と立憲主義(政府を縛る)の仕組みを確立・維持をすればよいということであった。

戦争をなくすことは正直なところ出来ない。しかし、減らすことはできる。もっと国連に強い力をつけて、戦争を起した国には重い罰を下すようにすれば、なくなりやしなくても減少するだろう。あと、もっと世界的に異文化理解を深めるべきである。自分の文化基準で物事を考えず、相手の文化などを理解することで、相手の考えも分かるようになり、双方の思い違いもなくすることができる。

今回の授業では、民主主義や政治について学んだ。政治リテラシーとは、政治に関する関心、知識、行動力であり、政治で必要なものは、価値の配分と権力であると知った。

最初に、イラク戦争の様子と東日本大震災の様子の2つの映像を観た。イラク戦争では、友人の死体を見て泣き叫ぶ人の様子や、小さな子供の死体など、見ていて心が痛くなるものばかりだった。

また、第二次世界大戦中のドイツの強制収容所での様子の映像を観た。高校の世界史の授業でも見たことがあったが、人を物のように扱う行為は、何度見ても衝撃的で許せないものである。国家権力の強大さや、ヒトラーのように国家権力の濫用によってこれだけの人を動かすのだということを学んだ。強大国家権力性悪説への対策としては、民主主義の

考え方で、悪い政府は変えること、そして、憲法によって政府の行動を縛ることが挙げられるのだと知った。

2015年6月、選挙権が18歳以上に引き下げられたが、日本の政府が悪い政府にならないためにも、私たち大学生が積極的に投票をしていかなければならない。

人為的な被害を改めて動画としてみると、どれだけ残忍なのかがわかりました。

人には動物よりも賢い脳を持っているけれど、使い方ひとつで最悪な結果を招きかねない。ということを知らされました。

文化の違い、知っていることと知らないことの差があるだけで多くの人がなくなり小さい子供まで巻き込まれて未来を一瞬で奪われてしまう。そして、その命を奪うのは私たちと同じ人間。どれだけ人間が愚かで悲惨なのかがわかります。

東日本大震災の被害は、当時中学生だった私には衝撃的なものでした。人の命がいつも簡単に奪われ去っていく、地震・津波の威力を改めてテレビの前で実感しました。しかし、地震・津波というのはどこの国でも起こりうることです。南海大震災の被害予想がだされ、避難準備をお早めにと言われます。今回の授業の動画を見ると、避難準備ができるのは当たり前じゃないんだなと感じます。

今年から私にも選挙権が与えられています。私は政治に興味がありません。ニュースなどで日本の政治へのイメージが悪いというのもあり、政治について調べることがなかったです。しかし、民主主義の国家で国民に権利があるのにそれを使わないのはもったいないと思うようになりました。今の日本の政治の本質を知らず、選挙に行くのは危ないので、日本の政治をしり、たかが一票されど一票を考えていきたいです。

今回の授業は、民主主義論について学んだ。私たちは民主主義国家に暮らす一国民として政治リテラシー(危険を察知し、果敢に行動すること)を身につけなければならない。特に注意しなければならないのは、国家権力の乱用の可能性である。強大国家権力性悪観を持つことで、政治が良くない方向へ向かってないか敏感に察知することができる。

授業では今の日本の政治について、政府の強大な権力を縛っている憲法が危うい、政府の手によって犯されようとしている、といった説明があった。まさに国家権力の乱用の予兆である(もうはじまっている?)と言えるだろう。ではなぜ日本では「悪い政府を変えよう」という運動が起きないのだろうか。私は、国民が与党(自民党など)よりも野党(民進党など)側に不信感を持っており、政権交代した際、現在の生活よりも生活が悪化しないかと危惧しているのだと考える。過去に民主党が政権を握ったことがあったが、当時の Manifesto がことごとく裏切られたことが強いイメージとして国民の記憶に残っている、ということが理由の一つに挙げられる。国民の意見を大きく反映できる「強い政党」の出現が望ま

コメント [y65]: そのとおりですね。

コメント [U66]: かといって、野党が弱いままで与党一強体制では、有権者には選択の余地がないわけで、結果、独裁的な政治を招くこととなります。「野党はだめだから投票しない」という態度でなく、「野党はだめだけど、政権交代の選択肢に育てる」という発想も大事です。

れる。

民主主義の国で生きながら、民主主義について考えたことがない。これは問題である。当たり前のように私が享受している平和は、当たり前ではない。これも問題である。世界がなぜ平和でいられないのか?なぜ争いをなくせないのか?

自分の生きる国と世界の歩んできた道のりを振り返り、未来について議論し、人類にとってより良い道を見据えることは、日本では「教育・勤労・納税」に比肩する、国民の在り方として重要なことではないだろうか。

民主主義は何であるか、その在り方を考えると、今の日本は健全な民主主義国家とは言えない。健全な、とは、人が自分の属する社会や国に疑問を抱いたときに、それをためらうことなく提言できるか、ということだ。日本の報道自由度が世界の中で下位であるという見方は、日本の社会や国としての健全さが揺らぎ、崩れようとしているかもしれない現状に対する警鐘とも捉えられる。

大学に在学する間、総合科学部とは何かを問い続けると同時に、民主主義の国に生きる自分の使命は何か、そしてその使命を果たすために何をすべきかを考え、見つけるために学びたい。

今回の講義では、民主主義論について学んだ。特に、政治に対して関心、知識、行動力を持つ必要性についての講義であった。私は誕生日が遅い方なので、昨年の衆議院選挙に投票することができなかった。しかし、もし私に投票権があったとして、現状の変化を維持しようとする社会において政権交代が実現するのだろうか。批判するわけではないのだが、今の政権は国家の力を強大にして、権力を濫用している。講義でも言っていたが、安保法制で集団的自衛権を認めるカタチをとった。これはいかながものだろうか、東日本大震災後に自衛隊の活躍は非常に大きい。自衛隊なしでは救助が迅速にできなかっただろう。この面では人命を救うための活動である。しかし集団的自衛権では同盟国同士で守らないといけない。日本が戦争したくなくてもかり出されてしまう恐れがある。これは、良いことなのだろうか。憲法 9 条で平和主義を明記している。このように明記しているのは日本だけであり、二度と戦争を起こさないように誓ったはずなのにこれでいいのか。天災と人災の違いは、天災は自然のことであるが、人災は避けることができる、避けることができるのに避けないのか。世界情勢的に武力を一切持たずに存続する国はいないが、このまま全ての国が武力を保持して強大にすると、いつかは爆発するのではないか。一方で、今の政権は外交では長期政権を握っていた経験から他の党に比べてはるかに高い能力を持つだろう。交渉などでもっと多くの国と親密になるべきである。このために我々に求められるのは、危機をいかに敏感に知り、いかに果敢に行動できるかである。大切なことは偏った

コメント [U67]: 昨年は参議院選挙です。

メディアの意見でなく多くの情報を手に入れて行動することが求められる。また、期末レポート課題「共謀罪」について出題されるのであまり多く言えないのだが、私としては「議論不足ではないか」という意見である。最近の議会では、強行採決が多い。これは議会として十分な議論をしておらず納得してないからである。議会で熟考していないのに、国民が理解できるのであろうか、いやできるわけがない。時間がかかっても強行採決をせずに議論していくべきであっただろう。

今回は饗場先生による「民主主義論」の授業だった。強大国家権力性悪観のことや、政治リテラシーが求められること、政府の権限を抑えるために憲法があること、現在の日本で立憲主義や知る権利が脅かされつつあることを学んだ。

授業の中で、饗場先生が「民主主義はベストではない。他の制度よりマシだ。」ということをおっしゃっていたが、私も同意見だ。民主制のデメリットについて一部書き出したい。

- ・ 多数派が正しいとは限らない
- ・ リーダーが変わるときに政治的停滞が生じる
- ・ 決断から実行まで時間を要する

また、1920年代には、世界一民主的な憲法を有していたと言われるドイツからナチス政権が生まれた歴史もある。そして、独裁政権によって経済成長を果たし、国民の生活水準を向上させた例もある。しかし、歴史的に見て、独裁制で人権が侵害されたり、貧富の差の拡大が生じたりした例が多々あることから、現状で民主制を取り入れるのが妥当だろう。そして、ナチスのような政権を生み出さないようにするためにも、政治リテラシーが必要だ。

ここまで、私と饗場先生との意見が一致しているが、集団的自衛権に対する主張など意見が異なる部分があるが、今回の授業は「民主主義論」についてなので、ここで私の意見を主張するのは控えようと思う。来月、もう一度饗場先生の授業があるので、そのときに私の意見も読んでいただけたらと思う。

「碑文を見て、何か引っかかるか。たいていの人は気付かないと思うが」

しつこくそう繰り返されたので、二重三重に重なったところにその引っ掛かりがあるものと身構えて読んだ。しかし、いざ種明かしをされてみると、おそらく全体の8割は気付いたであろう回答「天災か、人災か」であった。天災による悲劇は「二度と繰り返されないうよう」努めるものではなく「被害を最小限に抑えるよう」努めるものだというのは、あらかじめ言われなくとも分かる。

その後も政府を猛獣にたとえた分かりやすい憲法の話や、それに関して今日本が抱える政治の無関心についてなどを解説されたが、表現の仕方もあいまって「思想を操作されて

コメント [U68]: 他の弱点は、たとえば、民主政治は容易に衆愚政治に墮すること。

コメント [y69]: どのような主張なのか、具体的に書いてください。

コメント [U70]: でも、日本の安全には集団的自衛は必要だろうという意見ですかね？この点は時間の関係で説明できませんでした。「国際政治学入門」（一般教養）の授業で詳しく説明しますけど。

いる」という印象が強く残った。「人間には無能な、邪悪な人もいる」「神様に政治をお願いできない以上この映像の前提で考えるしかない」講義の中ではこう断定していたが、本当にそうなのか。まるで「世界が無能で邪悪な人間のみで構成されているような考え方ではないか。そうならたとえ民主主義に則って無能な権力者の権力を剥奪したところで、次の権力者も無能な人間ということにならないか。そして現在の政治は、何も利点が見出せない絶対の悪なのか。

強大国家権力性悪説も、考えられる利点を挙げた上で唱えなければ、本当に悪なのかは判定できないというのが私の意見である。

今回の講義では、政治に関心を持ち考え行動することの必要性について学んだ。現在の日本は投票率の低下、メディアの衰退、さらに秘密保護法や集団的自衛権の強行採決を許すなど、国民の生活が政府によって脅かされかねない危機的状況にある。さらには政治を縛るはずの憲法すらも軽視されてしまい、我々の政治リテラシーが試される状態にあると言える。

つい先日、共謀罪が安倍政権により強行採決されてしまった。twitter は荒れ、一部の人が国会議事堂前に集いデモを起こしたが、徳島大学では一度も共謀罪について議論しなかった。現代の一般大学生の政治関心は非常に低すぎるだろう。

一般的な中学高校では政治について詳しく教えてもらえないし、議論をする練習さえしない。しかしいつまでも「触らぬ神に祟りなし」的な学習では政治に疎い人間になってしまう。政治に関心をもつ大切さを大学で初めて学ぶには遅すぎるだろう。若者の政治関心を高めるには、日本の教育制度を改め直す必要がある。

今回の講義では、民主主義について講義を受けた。今回の担当の先生の話は、以前、自分がいた高校で18歳選挙権について話をしてくださった時と同じ内容だった。複数の人がいるから政治が生まれ、また提案を受け入れさせる権力も大事になるということであり、ナチスによるホロコーストを例に、国家権力の氾濫についても学んだ。戦争や虐殺といった国家権力の濫用を防ぐために民主主義があり、憲法には自分たち市民が政治を制限させる役割がある。強大国家性悪観を持ち、敏感に危機を感じ取り政治に対して常に興味関心を持つことが大事である。

今回の講義のスライドショーには、集団的自衛権についての説明や現政権のしたことの意味といった、今回の講義内容とは全く関係ない記述があり、かつて戦時中に行われていたプロパガンダのように思えた。政治についてよし悪しを決めるのは一個人であり、ましてや大学といった教育機関でそれについて一方的に言及するのは間違っていると思うのですがどうお考えでしょうか。

コメント [U71]: そういう説明はしてませんが、「もちろん人間には有能な人も善良な人もいます」と言いました。だけど、どうでない人もいるので、そういう人が国家権力を握る場合、つまり「ワーストケース・シナリオ」の場合を考えないといけないということです。

コメント [y72]: そのようなことは言っていませんでしたが。

コメント [U73]: 強大な国家権力の利点は、それによって政治が機能するという根本的な利点です。しかしこれは場合によってはとんでもない悪にもなるわけです。この点も説明しました。

コメント [y74]: 授業は、「国家権力は必要」ということを前提として、「暴走するとあまりに危険なので、抑制する手段が必要」という趣旨でした。

コメント [y75]: 具体的にどのように改めなおすのがよいでしょうか。

コメント [U76]: 確かに、中高の社会の授業、とくに先生に課題があります。

コメント [U77]: 当然、関係大ありだから説明しているのですが。おそらく、個別の政策のよしあしだけ切り離して、捉えているのではないですか。授業の趣旨は、個別の政策の賛否、個別の政党の賛否という問題でなく、もっと本質的な普遍的な原理・仕組みの問題です。

私は今まで政治に興味はあったが、一度考え出すと色々な分野のことが絡んできて、自分の無知さや無力さをしみじみと感じるものであるという勝手な概念から、考えることを避けがちであった。しかしながら、今回の饗場先生の講演を受け、政治に対しての姿勢を考え直す必要があると思わざるおえなかった。利害がぶつかることを避けるため、多くの人が平穏に暮らすことのできる社会の形成のための政治のはずが、私たちが無知であるため、政治に興味関心を持たないが故に、見えていなかった危険は、人の命が7~8桁も奪われるほどのものであることを改めて自覚させられた。今後の社会を担っていく世代である私たちが、もっと強大国家権力性悪観を前提にした政治リテラシーを獲得していかなければ、最悪の自体もないとは言えない。だからこそ、まずは、日本政府が掲げている政策やその仕組みを知り、考え、民主主義国家である日本で自分の考えがどのように反映されるのか、国家権力に好き勝手されないで済むのかなど、少しずつ知識を増やしていき、行動に変え、危機を回避したい。

今回は民主主義ということについての講義であった。政治リテラシーとは政治に対する関心、知識力、行動力である。これが強大国家権力性悪観の認識につながる。一枚の写真を説明なしに紹介された時私は違和感を持たなかった。その後、ヒトラー政権により無残にも殺された遺体と東日本大震災の津波で亡くなった方々の遺体の写真が紹介された。ここで考えるのは、人災と天災を一括りにしているという点だった。どのようにして人災を予防するかは民主主義と立憲主義の枠組みを確立することにある。

私は政治に関する問題については遠ざけていた。しかし、過去にヒトラーのような独裁国家があったと考えると、真っ先に被害を受けるのは私たち国民である。自分達を守る上でも民主主義という考えを国民自らが考え政治に対して受け身にならないようにしていきたい。

今回は民主主義の授業ということで政治リテラシーの獲得や国家の役割やビデオを見て国家権力の強大さを学んだ。普段ニュースによくでるキーワードの意味を細かく説明してくれてとても勉強になった。また憲法というのは国民を縛るものではなく政府の働き縛るものという解釈は分かりやすかった。その政府を決めるのが選挙であり民主主義の特徴だ。今の日本は特に若者の選挙投票率が非常に低くなっている。これからの日本を支えていく世代が選挙に行かないと自分達があまり優遇されない制度ばかり作られてしまう。もちろん高齢者問題なども重要なのだが選挙立候補者は高齢者の投票率が高いのは分かっているので高齢者を優遇する政策ばかり考えてしまう。それでますます若者の政治に関する関心

が薄まっていると言える。そうならないためにも私達若い世代も選挙に行くことが大切だ。

今回の授業では政治リテラシーについて、政治に関する知識や関心、行動力を身につける大切さを学んだ。身につける上で大切なのは強大国家性悪観を前提とする認識を持つこと。最もひどい人災は国家が加害者となり国家権力によってもたらされる人災で、それを防ぐために民主主義が存在する。政治とは複数人が生活していく上で利害がぶつかった時、価値を配分し権力をもって争いを避ける役割がある。しかし権力を持つということは濫用の可能性があるため悪い政府は変え政府の行動を縛る必要がある。そこで民主主義の政治では平和的に政権交代ができる仕組みと憲法によって縛られているが、現在の日本では投票率の低下、メディアの衰退、秘密保護法や共謀罪によって国民の権利が侵害され安法制で集团的自衛権が認められ自民党改憲案により政府を縛るための憲法が内閣によって変えられようとしている。国民が自分たちの権利を守るために憲法を作っているのに政府が解釈を変え、縛りを緩くしてしまったらなぜ憲法があるか分からなくなってしまう。安倍政権が秘密保護法を作り安法制により集团的自衛権を認めたことで国民の権利は失われつつあるのにもかかわらずそのような政権が変わらないのも不思議である。これはメディアの衰退により偏った情報しか得られていない結果だ。私たちはその勢力をよく知りおかしものはおかしいと声をあげていかなければならない。第二次世界大戦中の日本やドイツのような独裁政治、偏った政治からどうすれば民主化できるか学んだはずである。今こそ行動に移さなければならない。

今回の総合科学部入門講座は、政治リテラシーの必要性について学んだ。政治リテラシーとは政治に対する関心、知識、行動力のことを言い、この政治リテラシーが低いと選挙や国の政策に関心を示さなくなる。その結果、自分の国のことなのに人任せになってしまう。

今回の授業ではその政治リテラシーを高めたいと思える授業だった。なぜなら、私たちが政治に関心を示さなくなり、選挙権を放棄してしまうことで困るのは私たちだからだ。最近よくテレビなどのメディアで「シルバー民主主義」という言葉を聞く。シルバー民主主義とは少子高齢化の影響により有権者の中における高齢者の割合が高くなることで、選挙での高齢者の影響を大きく受けることだ。票が欲しい政治家は有権者が魅力的だと感じる政策を掲げるが、高齢有権者が多いので高齢者が得をする政策が多くなってしまふ。そこで困るのは私たち若者なわけだが、投票に行かない者が多いのであまり文句は言えなくなるのだ。

私は、この現象に民主主義の衰退を危惧している。よって、今日の授業で民主主義や人災によってもたらされた戦争などの悲しさを学んだことによって、もっと私たちは政治に

関して真剣に向き合うべきだと考えなおせた。この授業は私たちが社会をつくっていく上での第一歩になっただろう。

今回の講義では、政治、とくに民主主義について学んだ。政治とは社会における利害の調整であり、政治が機能するには価値の配分と権力が必要である。この世で最悪の人災とは国家権力によるものであるため、国家権力の大きさ、そして濫用の可能性を知っておくという強大国家権力性悪観を前提の認識として持ち、「政治リテラシー」を獲得しなければならない。そして、現状への認識と行動により、危機を回避していかなければならない。

本日、共謀罪が強行採決された。国会議事堂前では、デモが行われている。共謀罪は思っているだけで罰せられるという、国民のプライバシーと人権を無視したものであり、到底納得できるものではない。地図と望遠鏡を買っただけで下見とみなされ、罰せられるということだ。一般人は捜査対象であるのか、政府内でも認識の食い違いがありはっきりしないままであるにもかかわらず、国民を縛る法案を強行で通すことは、立憲主義や民主主義の考えを無視したものである。政治にはかかわらないのが無難であるなどという甘すぎる考えなど持っている場合ではない。

今回の授業は立憲民主主義のことについて学んだ。今日の社会は政治と宗教に関わらない方が無難と思っている人が多い傾向にある。しかし、そうするとゆでがえる状態になってしまう。そうならないようにするために危機をいかに敏感に知り、いかに果敢に行動できるかになる。そのためには、政治リテラシーが必要になってくる。国家権力は強大であり、国家権力の濫用可能性がある。ナチスドイツはいい例である。だが、民主主義ということは、悪い政府は変えることができ、憲法によって政府を縛ることができる。私たちはこのことを十分に理解し、さらに政治に参加していかなければならない。今、今後も戦争は絶対に怒らないという保証はどこにもない。歴史の繰り返しにならないためにも私たちが政治リテラシーを所持するということが必須になってくるはずだ。

今回の授業では、政治についてのことを学んだことが印象に残っている。まず、政治とは、複数の人がいると政治がある。また、複数の人がいると利害がぶつかる。複数の人がいると調節をはかる必要がある。ということ学んだ。価値の配分と権力が関係している。もし国家権力が人間により不適切に行使された場合今回の授業でみたように残酷なことが起こってしまうのだ。

まず、今回また映像からわかることは、国家権力の強さや国家権力の反乱可能性だ。神様に政治をお願いできない以上この映像のように、強大国家権力性悪観というものが成立

してしまう可能性がある。天災で人が死亡してしまえのはやむを得ない。また、「大自然を前に無力な人間」という謙虚さを認識するしかないかもしれない。しかし、政治による人間の死亡などは起こってはいけないことだ。戦争のない平和な国を約束して来た日本でさえ、安倍内閣により集団的自衛権を認めた。私は、これを認めてしまうことを強く反対する。集団的自衛権を認めるということは、事実上戦争を許可するといっても過言でないからと考えているからだ。

また、悪い政府は変える民主主義や政府の行動を縛る憲法というものをもっと活用して権力の氾濫を防いでいかなければならないとわかった。そして、現在日本での若者の選挙投票率は低下していることが顕著にみられている。投票に行く時間がないなど、様々な要因はあるとは考えられるが、私自身も時間を作っても投票に積極的に参加していかなければならない。日本の将来を担っている私たちが動かなければ政治権力について意見することはできないからだ。

授業でも言われていたように人災は避けようがある。しかし、最近では天災さえも避けられるものにしてようとなされている。厳密に言えば以前からその試みはされて来たが、近年ではより具体的な数値として地震予知が発表されるようになった。私はこの風潮に対して賛成はできない。なぜなら地震に関する情報を持っている人に対して地震は避けようものとなるし、情報を知らなかった人に対しては天災だからしょうがないね、となるのはおかしいからである。今の時代、確かに情報の強さは強大であるが情報を知らなかったから命を落としても自己責任だといわれるのは違うだろう。また、その数字を信じすぎて「自分の住んでいる地域に断層はないから安全」と思い込む人も出るだろう。だから私は数字を出さず、だれもがいつ地震が来ても対応できるような対策だけを発表し、予知情報は出さないほうが良いと考えるのだ。

今回は民主主義について学んだ。民主主義は完璧な原理ではなく欠点もある。その欠点による危機を敏感に感じ取り、行動することが必要となる。そのためには、政治に対する関心・知識・行動、つまり情報リテラシー情報リテラシーが大切である。

民主主義的な政権でもヒトラーが登場した事実がある。アメリカ大統領のトランプは少しヒトラー色が強いようにも思える。また、投票率が減っていることも問題だ。近年、政府は情報秘密保護法を制定したようだが、情報を提供することによって我々はより投票しやすくなるのではないか。

このように今民主主義は危機を迎えている。政治家 1 人だけでなく国民全体が情報リテラシーを持つことが必要である。

今週の授業は民主主義と政治の話だった。私は先生の話が悲しいと思う。確かに、先生の話は正しくて、民主主義社会に対して身につけるべきものだった。ただし、このような考えは民主主義社会で話さないべきだと思う。なぜなら、これは民主主義の社会で、誰でも知っていったので、話す必要がない。民衆は政治リテラシーを持っていないとは実際の民主主義社会の終わりと思う。民主の政治で、民衆が政府の暴走の防止と言う役目がある。その上で、この役目を知っているだけではなく、日常生活の習慣にならなければならぬ。もしある国は、民衆が政府の行動に関心がないと、そのままに放任すれば、今また民主な憲法をもって、将来は必ず失うだろう。例えば、中華民国の初めの時、中国もアメリカの流儀を受けて、民主主義の憲法を作ったか、民衆がその憲法を理解できなくて、そのままに政治家の暴走を放任した。結局は中華民国の民主を失って、独裁になった。そのようなことはもう一度起きる可能性があるだけでも、悲しすぎると思う。

民主主義では、国民一人一人が政治に関心を持ち、大きな力を持った国家が間違った方向に権力を行使しないように議論していくことが大切だ。

近年の日本では特に、安部政権の憲法解釈による集団的自衛権が議論されている。国民が国家を監視するために憲法を変える場合は問題がない。しかし、憲法の解釈を変えることは、実質的に国が自ら憲法を変えたことになり、民主主義ではなくなってしまうのではないだろうか。

政治は一人一人に結び付いているものであるので、これから正しい情報を得て、しっかり意識していくことが必要だ。

今回の授業では、饗場先生の国際政治に関する講演を聞いた。その授業の中で見た映像は今までに見たことのない映像ばかりでとても衝撃を受けた。我々は、日々の生活の中で戦争の恐怖など感じないで生活しているが、海外では結婚式をしている時に爆撃にあうということがあり、我々の生活がどれだけ安全であるかを改めて実感することができた。戦争とは政府が関わっているものであり、政府がきちんとした政治をすることで世界中が安全で平和な生活を送れるようにしていく必要がある。そして、この授業をきっかけに世界で起こっている戦争のことにに関して調べ、戦争について改めて考えていきたい。

コメント [y78]: 授業の主要なテーマは「戦争」でなく、「民主主義について」でしたが。

民主主義国家が理想の国家という訳では無いが、今までに日本や世界が歩んできた国家統治体制の中では最も多くの人々の権利を約束されていると言える。もちろん独裁国家で

あっても上に立つものが権利を濫用せず、弱者を虐げなければ良い社会になるが残念ながら歴史上その様なケースは少ない。

権力のある者は自分の利益が損なわれることを恐れて身分の低い者に選挙権などの権利を与えず、これに抗おうと身分の低い者達が反乱を起こして権利を手に入れる。しかし、権利を持ってしまえば彼らも結局自分達がされた様に身分の低い者を虐げてまた革命を起こされてしまう、という悪循環。この典型に当てはまるフランス革命では王政が倒されて共和政になるのだが、日本も少しばかり民主政というよりかはこの共和政に近くなってきている気がする。なぜなら民主政治では国民である私たちの権利が尊重されており、この権利を有意義に使うって自分たちの社会をより良いものとするのができるのに私たちはその機会と権利を自ら手放す様になってきているからだ。政治に直接携わるのは政治家や議会であっても、彼らを選び出すのは紛れもなく私たち国民の権利であるし、もっと言えば政治家よりも国民の権利の方が優越しているのだ。それなのに私たちがこの権力を使って彼らを見定めなくなってしまえば彼らに好き放題させることを許しているも同然だ。これでは民主政ですらなく、政治に関わる一部の人間の思い通りになってしまった共和政に他ならない。

民主主義国家が全てにおいて理想の国家だとは言えないが、人口の増え続ける現代において利害の衝突は避けられないだろう。それでも、すべての国民が権利を行使して納得の行く選挙を行うことで自分たちの生活がより良いものとなっていけば、「理想の民主主義国家」になり得るのではないだろうか。

今回の授業のテーマは、国際政治学についてだった。私は饗場先生の国際政治学入門という授業を受講しているため、今回の授業と同じ内容の授業を既に受講していたが、改めてアフリカ地域の戦争被害の映像を見ると、私がいる環境との差に驚くばかりだった。同じ地球に住んでいるのにここまで住んでいる環境に差があるのはどうしてなのか、とても疑問に思う。同じ世界で生きている人間として、こういった人たちに何もしてあげられない無力さに情けなくなる。長年戦争が続いてきたこの地域で、突然戦争を無くす事は難しいが、少しずつでも戦争のない社会にしたい。そのために、まずは一人ひとりの考え方を改める必要があると私は思う。同じ日本人でも価値観や意見の食い違いというのはあるため、違う国となれば日本人とは考え方が真逆になる事もあるだろう。相手に自分の考えを伝えるためには、まず自分が寛容の心で相手の意見を受け止める事が大切だと思う。

今回の授業の冒頭では、前回の講義を行ってくださった依岡先生が授業コメントでの質問に対する返答を説明していた。私は以前例えるならば趣味と仕事を同一のものとして考えるように「読書」というものを認識していたため、楽しむための読書と学ぶための読書

の差異について悩んでいた。しかし、他の人の授業コメントや先生方の指摘を読むことによって、楽しむための読書も学ぶための読書も目的が違うだけで結局は同じことなのだと分かった。

次に山口先生による授業内容の確認のための小テストが行われた後、今回の本題である「政治リテラシーの必要性」について講義が行われた。まず「政治リテラシー」とは政治に関する関心や知識、行動力のことである。この「政治リテラシー」を身につけることによって、我々は危機に敏感になり果敢に行動できるのだが、これを身につけるために必要となる前提の認識がある。それは「強大国家権力性悪観」と呼ばれる、国家権力の強大さとその濫用可能性に対する恐ろしさを知ることだ。「国家」とはまるで鎖の付かない獣のようなものである。大人しく寝転んでいるだけではなく、辺りを駆け巡っては誰かに噛みつき傷を負わせる時もある。このように国家の身勝手な行動によって国民が傷付けられないようにするために二つの策がある。

一つ目は民主主義のもとで選挙による平和的な方法で悪い政府を変えることだ。このことは最高の方法ではないのだが、人間が思いつきうる方法の中で最も良いものなので採用されている。民主主義のもとで国家をより良くするためには有権者が賢明であり、なおかつ報道の自由があることが求められる。しかし現在の日本は投票率の低下・メディアの衰退・秘密保護法・共謀罪などによって上記の必須項目が満たされなくなっている。

二つ目は憲法によって国家権力の行動を縛る、いわゆる立憲主義だ。これは勝手に振る舞う政府という名の獣を檻に入れることに例えられる。しかしこの立憲主義も民主主義と同じように危機にさらされている。なぜなら自民党が憲法改正をとらね、猛獣自身が檻を破ろうとしているからである。

このように国民が国家による被害者にならないための方法はあるものの、最近はその方法の維持が危ぶまれているのだ。私たちはこの現状を打開するために「政治リテラシー」を身につけ、有権者としてきちんと選挙で投票することや自分自身が立候補することが必要である。

ところで今回講義内に登場した単語の一つに「共謀罪」というものがあつたが、5月25日の朝日新聞にて共謀罪の採決が強行されたと報じられていた。私は少し前に図書館や生協前の掲示ポスターによって「共謀罪」という言葉を初めて目にした。恥ずかしいことに新聞やニュースを確認することが習慣化していないため、その時はその言葉自体も聞いたことが無い有様だったのだ。その後新聞に掲載されていた共謀罪に関する記事を読んだ私は思わず眉をひそめた。なぜなら犯罪を未然に防ぐための共謀罪には内心の自由を侵す恐れがあると知ったからだ。勿論一つの新聞記事から与えられた影響に過ぎないため、また別の視点から書かれたものを読んでいた場合にはまた違った意見を持ったかもしれない。このように確かな知識がない場合には「信頼できる」と思われる意見に人は染まりやすい。しかしその「信頼できる」と思った意見も真実を都合よく隠されたものかもしれない。私たちにこのことを念頭に置いて多くのメディアを眺め、多角的な視点を持つことが必要

なのだ。

私達の命を奪う大きな脅威として天災と人災がある。どちらも目を覆いたくなる災害であるが私達はそれらを防げることが出来るだろうか?自然の脅威に対して私達人間は弱者である。未然に防ぐことは難しく、突然やってくる。それに対して人災はどうだろうか?人災とは戦争である。戦争は誰がするのか?それは国である。私達には国の悪行を止めるすべを持っている。それは憲法であり民主主義の体制である。私達はこういったことに対応すべく政治リテラシーを付けなければいけない。そのためには様々な報道を見るのが1番だろう。しかし、気おつけなければいけないのは、偏った知識である。様々な視点と良い点、悪い点を知り自分の意見を持つことは政治だけでなく、社会の中でも重要なことである。

今回の総合科学入門講座では、饗場和彦先生による「立憲民主主義-政治リテラシーの必要性」という題名の講義を行ってくださった。

まず初めに総合科学入門講座の目標の一つである、根拠に基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し合意を形成する能力について触れ、この考え方が民主主義の仕組みにおいて不可欠なプロセスだと教えていただいた。そして、民主主義をめぐる最も基本の観点についての話に移った。

民主主義の基本的な観点とは「政治リテラシー」の獲得ということであった。そして、政治に対し無関心であるままであると、どうなるかを「ゆでガエル」の例を挙げて教えていただいた。「ゆでガエル」については具体的には、熱湯に入れると飛び出すカエルが、水から徐々に加熱していくとゆであがってしまうというものだ。この例のように「ゆでガエル」我々は危機をいかに敏感に知り、いかに果敢に行動できるかということに「政治リテラシー」があれば対応できるということであった。

続いて政治に対する関心、知識、行動力というものが「政治リテラシー」であると教えていただき、これを身につけるために必要な前提認識について教えていただいた。まず、沖縄にある碑文や映像を見せていただき説明してくださった。そして、戦争と災害の決定的な違いである「人災」か「天災」という点で分けることができるという視点が大事なのだとおっしゃっていた。もし、戦争と災害を一緒にとらえると加害の主体、それへの対策を見失ってしまい惨状に苦しめられてしまうということでした。つまり、人災は起こしたとされる人物がいるため避けることができるものであるということでした。そしてその中で最も酷い人災はどのようにしてもたらされるか、つまり加害の主体は何かという問いと人災を避けるためにはどうしたらよいかという問いが出てくるのだという。

続いて政治とはそもそもどういったものなのかを教えていただいた。政治とは、複数人の人たちがいる場合利害衝突が起こってしまう、そのような社会の中における利害の調

整・解決を行うものが政治だとおっしゃっていた。また、安心して暮らすためには政治というものが必要であり政治が機能するためには1 価値の配分と、2 権力がいるということであった。そして、次に政治は政府によって行われるということを前提とし、もしも政府の人間が無能であったり邪悪であったりした場合には、国家権力を不適切に扱われてしまう恐れがあるということであり、ナチス政権時のアウシュヴィッツ収容所を例に挙げて教えていただいた。そして、国家権力が暴走することによって莫大な被害を生み出すため、国家権力の強大さと、邪悪な人物などが権力を濫用する可能性を指摘していた。このようなことは、神様に政治お願いできない限りは「強大国家権力性悪観」を前提条件として考えるしかないということであった。そして、悪い政府を防ぐ方法としては1 悪い政府は変えるということ、2 政府の行動を縛ることが重要なのだということであった。まず1 についてだが、悪い政府について我々の意見の元選挙によって変えるという行為は民主主義らしい行動であり、これを成立させるためには賢明な有権者、報道の自由・知る権利が必須となってくる。しかしながら、今現在、低投票率、メディアの衰退、秘密保護法や共謀罪によって危機的状況に陥っているということであった。2 については、政府の行動を縛るということで憲法が挙げられた。国家権力というものは猛獣であり、放っておけば我々市民を襲う恐れがあるため、それを防ぐためにも猛獣である国家権力を入れる檻の役割として憲法が重要なのだということであった。しかしこれもまた、今現在危機的状況にあるのだとおっしゃっていた。具体的には、安倍政権で作った安保法制により憲法を軽視するような内容が読み取れたり、本来は政府の行動を縛るためのルール・規則である憲法が国民を規制するようなものになりつつあるということであった。そして、現在の日本が危機的なのだとを確認し最後にまとめを行い本日の講義は終了した。

人間というものは誰しも邪悪な部分や悪い面でもよくというものを持っている。だからこそ、今はヒトラーのしたことや戦争はいけないことだと思っても、現在の日本のように政治の無関心を続けていけば、自分の意見を言わないままいけば、もう一度ファシズムのような独裁主義が出てきてしまうはずだ。民主主義の国である日本において、我々の運命を決めるのは政府でもなければ世界でもない、我々国民自身なのだとことを自覚できていない今の日本人はもう一度第二次世界大戦のような同じ過ちを繰り返すであろうことは避けられない。今一度民主主義についてを知り、自分の意見が通らないなどと決めつけずに政治に目を向け、国民全員で政治に参加していくべきである。

今回は饗場先生の国内外における政治についての授業だった。恥ずかしいことだが、私は沖縄の記念碑を見た時、違和感を感じなかった。どちらも多くの人が亡くなる大きな災害だった。しかし大いなる自然の力によって起こる天災と、故意的な力によって起こる人災とは、確かに話が違う。私は加害の主体を見失っていた。また映像の世紀などいくつかの映像を見た。祝福の場であった結婚式場が一瞬で死体の山になり、生まれた人種や愛

し方によって強制的に殺される。個人に比べ、強大な国家権力による制裁は凄まじい。しかしこれらを他人事だと思っはならない。いつ私達の身に降りかかってもおかしくはないのだ。

そして饗場先生は政治リテラシーの獲得を目指し、強大国家権力性悪論を唱えていた。そこで私達が今、出来ることはまず情報を集めることだ。メディアやネットを通じて流れてくる情報から真実を見極める。また報道されている情報が表向きであって、どれが真実で嘘か分からないとしても、私達は知ることを続けなければならない。考えることを放棄した時点でそれは沈黙した多数派になり、国家の思うがままに進んでしまう。だから私達なりの意見を表現しなければならない。法や制度が決まった後に「あの時反対していれば…」と悔やんでも遅いし、選挙権を持つ私達は政治に参加する義務がある。

今回の講義は、映像とビデオを見た。その内容はユダヤ人迫害の惨状や東日本大震災の犠牲者とその遺族たちの様子を撮影したものである。ユダヤ人迫害のビデオはかなりショッキングなもので、目を背けたくなるようなほど死体がたくさん写されていた。東日本大震災の映像も死体が写されていたが、授業でも先生がおっしゃっていたように、震災は天災であり人間の、自然の前での無力さを感じた。戦争と震災、どちらも人の命を奪う恐ろしいことである。しかしながら、人為的に起こるものと自然の摂理で起こるものとは同じくくりにして「こんな悲惨な出来事が起こらないよう対策に努めます。」など言えないのだ。人為的に起こるものにはその当事者の心を動かすなど何かの行動をとれば変わるかもしれないが、地震や津波などの天災を予測して防ぐことなど科学の進歩がない限り出来ない。今、私たちにできることは命を粗末にせず生きていくことなのだ。

今回の授業は饗場先生による国際政治に関する講義を受けた。私たちは普段の生活で政治に関することを意識することがなく、「ゆでガエル」になってしまっている。

戦争の被害と災害の被害には天災か人災という違いがあると言われて、はっとした自分がいた。人災によっての被害を起こさないために、自分たちの身を守るためには、憲法解釈などで気まぐれに檻をゆるめる猛獣のことを知る必要があるのだ。

近年、民主主義の考え方において、政治リテラシーの獲得という観点の重要性が増してきている。政治リテラシーを獲得することで危機を敏感に知り、果敢に行動することができる。

政治リテラシーを身につけるうえで必要な前提となる認識がある。それは強大国家権力性悪観である。地震と戦争の被害はどちらも悲惨なものである。しかし地震は天災、戦争

は人災であるという決定的な違いがある。戦争と災害の被害を一緒にすると加害の主体は何か、それへの対策は何かということを見失ってしまう。災害は止めようがないが、人災は誰かがやったことなので避けようがある。最もひどい人災は、国家が加害者となり国家権力によってもたらされる。悪い人が国家権力を利用すると数百万、数千万人という被害者が出る。そこで悪い政府を変えようとする民主主義の動きが必要であるが、近年は選挙の投票率の低下やメディアの衰退など危機を迎えている。また憲法によって政府を縛ることも必要であるが、立憲主義を否定する傾向が強まっている。市民がひどい被害に遭わないためには、民主主義と立憲主義の仕組みを確立し、維持することが必要である。

今回の講義を受けて、私は政治などについての知識が足りていないことが分かった。自分の身を守るためにも、政治を身近なものとして捉え、考えなくてはならない。

今回の授業では、政治についてのお話をうかがった。始めに、二本の動画を視聴した。どちらも目を疑うような映像で、特に一つ目の動画は、同じ世界で起こっていることというのが信じることができず、とてつもない危機感を覚えた。しかも、その一つ目の出来事は「人災」であり、避けることができるものだ。「政治」によって回避できるかもしれないのだ。

政治は、価値の配分と権力という役割を持っている。しかし、それらが不適切に行使されると、国家は暴れだし最悪 7,8 桁もの死者をだすことになるのが現実だ。では、どうすればよいのか。二つの方法がある。一つ目は、民主主義による選挙で悪い政府は変える方法だ。二つ目は国家が守るべき憲法で政府の行動をしばる方法だ。しかし現代の日本では、投票率の低下や安保法制があり、どちらの方法も危機にさらされている。だからこそ我々が一刻も早く「政治リテラシー」を獲得し、ゆであがってきている日本の現状を認識し行動にうつさなければならないのだ。

私自身、やはり日常生活で政治についての会話をするなどめったにない。しかし日本も他人事ではないのだ。平和で治安もよさそうに思えるが、最近北朝鮮がミサイルを発射したし、二年前にはイスラム国にとらわれた日本人が殺害された。これらは、最悪の事態が起こる可能性があることを示唆しているのだ。その最悪の事態を回避するためには先ほど挙げたような事件に対抗してはならない。対抗して、無理やり押し沈めたとしても時を経てさらに凶暴になって反発してくるだけだ。その繰り返しを起こしてはならない。だからこそ、何か起きた時に力を使うのではなく、例えば文化やスポーツといった別の方面での力を最大限に利用することが必要だ。

今回の授業では、政治に関して学んだ。「政治に関わらないほうが無難」ではなく、政治に関心を持つ必要があるということを理解した。また、敏感になることも大事だということ

コメント [U79]: 残念ながら、武力は一定程度、必要性があるのですが、武力一辺倒では当然だめで、逆効果です。文化や教育やいろいろ非軍事のやり方など、多面的に駆使するのが重要です。

とも理解した。憲法は国家を縛るためのものであるが、国民に対するものになっている部分もあるということも理解した。

国民が政治に関心を持つことは大事なことである。なぜなら、国民に関わることだからである。選挙権を持っている国民は選挙に行くべきである。そして、ただ選挙に行くだけでなく、どの政党の考えがよりよい社会を作っていくことができるのか、などを考え、慎重に選ぶべきである。それは、もし政府の行動に不満を持ったとしても、「選挙に行かなかった」、「真剣に考えなかった」だけは、国民の意見として反映された以上、仕方がないということになるからだ。

また、政府は、どのような政策をするのかを国民にしっかりと伝える必要がある。各政党が政策を伝えないと、国民はどの政党が良いのか判断することができないからである。

政治は、より良い社会を作っていくため、国民全員が考えるべきものである。

今回の総合科学入門講座では、民主主義論について学んだ。総合科学入門講座の目的の一つが根拠に基づく合理的な考え方をもち、他者と対話し合意を形成する能力を身につけることである。これは、民主主義の仕組みにおいても不可欠のプロセスである。民主主義をめぐる最も基本の観点は政治リテラシーの獲得である。危機をいかに敏感に知り、いかに果敢に行動できるかが重要である。政治リテラシーとは、政治に対する関心、知識、行動力であり、政治リテラシーを身につけるために、強大国家権力性悪観の認識が必要である。

次に、今回の授業に対する意見として、選挙に行く重要性について述べる。今日、若者の投票率の低下が問題になっている。実際、自分も選挙権を有しているが、選挙に行くのが面倒だと感じる時がある。しかし、若者があまり投票しないことが原因で、政治家は高齢者向けの政策ばかり考えている。このため、若者はすごく損をしている。せっかく日本は民主主義国家なのだから、選挙を通じて若者を支援する政策を政府に求めることが重要である。だから、私たちは、政治に関心を持つことが重要である。また、おかしい政策にはきちんと批判することが私達に求められていることである。

・報道の自由度等が下がってきているとありましたが、ランキングにおける報道の自由の定義がよく分かりません。「自分たちが好き勝手に報道する」という自由なのか、「自分たちが真実を報道する」という自由なのか、それとも別の自由なのか調べても分かりません。

・政府は憲法を軽視し始めているとありましたが、私はそうではないと考えます。そもそも憲法は七十年ほど前に作られたものであり、国際情勢も当時とは異なってきています。特に韓国と北朝鮮はいつ戦争が始まってもおかしくない状況です。もし戦争が起こったと

コメント [y80]: 「報道の自由度ランキング」などと検索すればわかるはずですが。一次資料は、「国境なき記者団」です。

<https://rsf.org/en/ranking>

したら、日本や近隣諸国は北朝鮮にミサイルを撃たれる等の形で戦争に巻き込まれるかもしれない。そのような他国の動きから国民または近隣諸国を守り、平和を維持するために自衛権の確立や国防軍(※自民党改憲案の表現)を置く必要が今後あると言えます。今の政府の改憲の動きは、憲法ないし立憲主義を軽視しているからではなく、戦争が勃発しそうなほど国際情勢が危うくなっているから変えざるを得なかったということではないのでしょうか。

今日の講義では、政治的な関心が我々の考え生きる際の肥やしになることを学びました。私も同じ考えです。政治リテラシーは物事を客観的に見つめなおすキーとなり、それは他者と対話し合意を得るときの道具となる。また、**茹でガエルの例に似たものを私は高校生の頃、教科書で学んだ。ただ、権力があるからと言って眠れる獅子のままではいつかナチスドイツのように、権力の暴走に飲まれてしまう・・・といった内容で、大変関連性があると思った。**憲法に、国民主権は「国民の努力によって獲得された」と記載されており、その努力を怠れば、権力は喪失する・・・その教科書に感銘を受けた私は、今回の講義も大変楽しく受講した。すると、思っていた通りナチスが出たのでうれしかった。

また、私は同様に政治的背景にも興味がある。それは、講義中に見たシリア・イラクとアメリカの関係のようなものだ。海に囲まれて、戦争には程遠いような日本では考えられないことが海外では一般的だったりする。これはツイッターで見かけたのだが(信憑性は高くはない)シリアを旅行した人が真っ先に聞かれたのが「アメリカは好きか?」だそうだ。幸運なことに彼は「no」と答え、ご飯をごちそうしてもらったらしいが、あの時「yes」と答えていたらどうなっていたか、そう呟いていた。そんな事からも分かるように、海外には我々が思うより歴史に縛り付けられている国家が多い。しかし、そのバックグラウンドを知ることによって、人災を防げたり、他者との間を取り持ち好意的な関係を気付けることも可能である。**私は留学を経験したいので、機会があるならもっと詳しく学びたい。**

また、民主主義下で国家が暴走するなら、民主主義的手段をもって国家をけん制することも学んだ。我々民主主義の良い点は、首相が入れ替われる点にある。そして、その判断は我々国民の一票にある。大変すばらしいことである。しかし、最近の若者(特に大学進学で外に出た者)は選挙に行かない。それこそナチスの二の舞になり、いつかは自分自身の手によってなくした権力を嘆くことになる。

質問は、民主主義と立憲主義について。私は先ほども書いた通り、教科書で同じような事柄を学んだ。その際に、**立憲主義も限度を過ぎればナチスのようになると書いてあった。**たしかに、ナチスは不正などなしに民主主義的かつ立憲主義の国家に生まれた。あの世界一の独裁者であるヒトラーも選挙で公正に選ばれた。私はその文を読んで「それなら今日見たビデオのようにどこでも起こる可能性があるということか」と衝撃を受けました。しかし、だからと言って、今の日本を共産主義や社会主義に変えてもむしろ独裁色が強くな

コメント [U81]: いくつか論点がありますが、授業では時間がなく十分に説明できません。研究室に来てくれれば話します。簡単に言うと、一つは、国際情勢の変化は確かにあり、中国や北朝鮮は懸念材料ですが、憲法を無視して緊急に何かしないと明日にでもとんでもないことになる、という状況ではありません。もし、そういう国際情勢を心配するなら、きちんと正規の憲法改正手続きを踏んで、数年かけて改憲すればよいのです。それに尖閣諸島などの問題であれば、従来の憲法解釈のまま、世界でも有数の強い軍隊、自衛隊が合憲である個別自衛権を行使し、そして米軍の支援も得て、十分対応できます。つまり立憲主義の軽視を正当化できる理由はありません。

コメント [U82]: どういう話? できればその教科書の文章、教えてください。

コメント [U83]: 飛び立て留学ジャパン、って知ってますか。

コメント [U84]: この点は、民主主義も限度を過ぎればナチスのようになると書いていますか。確かに民主主義だけに頼ると容易に衆愚政治に落ちてしまいます。つまりおろかな民衆がヒトラーを支持する(イギリスのEU離脱しかり)。だから今のドイツでは民衆を全面的には信用せず、ヒトラー礼賛という思想や表現を禁止しています。日本では、ヒトラーはすばらしいと公言してもなんら問題ないですが。ここは難しい問題です。

るだけ。その教科書、ビデオ通りのシナリオを阻止するために、大事なことは何だと思いますか？

今回の授業では、政治リテラシーの獲得や国家権力に関する話を聞いた。危機をいかに敏感に知り、いかに果敢に行動できるかが重要であるということ、また、市民が被害に遭わないためには民主主義・立憲主義の仕組みの確立と維持が必要であるということ学んだ。政治を行う人は、全員がいい人であるとは限らず、国家権力を濫用し、多くの市民を犠牲にすることがある。例えば、ドイツのホロコーストやベトナム戦争などが挙げられる。このような人災は、国家が加害者である。どこでも起こりうる人災を避けるには、政府を変えることや政府の行動を縛ることが必要であるので、私たちは、政治に関心を持ち、積極的に参加するべきである。現在の日本では、安倍内閣が集団的自衛権の行使を認め、政府が守るべき憲法の縛りが解かれている。このように、立憲主義が否定されているにも関わらず、選挙の投票率が低い、政治に対する関心が低いなどの問題がある。いつまでも平和であるとは言い切れないし、油断はできない。人災が起こってからでは遅いので、今のうちから政治を理解し、政治に関わっていくべきである。現状をしっかりと理解するためには、日頃から新聞を読んだり、ニュースを見たり、周りの人と政治について話したりすることが重要であるだろう。また、私たち学生は、今回のような授業を聞いて、他人事だと思わずに、これからの政治に関わっていくのは自分たちであるということを実感しなければならない。

さらに、今回は、人災と天災に関する映像を見た。高校までは、震災や戦争などの映像は、道徳の授業で見ることが多く、命や生きることの大切さを学んできた。しかし、今回の授業では、加害の主体や国家権力などに着目して映像を見た。同じような映像であっても、着目する部分を変えるだけで見方も変わり、映像から読み取ることができるものも増える。一つの映像から道徳的なことだけでなく、政治に関することも多く読み取ることができるようになるには、政治に関する知識が必要である。こうした理由からも、私たちは、政治に関心を持ち、積極的に参加するべきである。

5月19日の授業では、主に戦争について学びました。地球上で、もたらされる被害は、人災と天災に分けられます。天災は、地震や津波など人間の力では、多少の予測はできたとしても、防ぐことはできないものです。しかしながら、人災は防ぐことができます。利益の不一致や宗教の違いから起こりうるものです。授業で映像をみましたが、布で覆われていた人が多く、悲惨なものでした。このような戦争の被害は起きてはいけません。最もひどい人災である国家が加害者となり国家権力によってもたらされる人災はもつてのほかです。これらの人災を防ぐために、強大な国家権力や民主主義の確

コメント [U85]: 新聞読むのは大変いいですね。その際、大きなニュースがあればなるべく複数紙、読んでください。最近各紙でだいぶ姿勢が違います。多面的に捉えることがまず大事です。

コメント [U86]: ここで書いていること、変です。授業ではそういう説明をしていません。

立が必要になります。

戦争を繰り返さないためには、核などの強力な武器がなくなればいいと思います。だから、無断で存在する核の工場を排除すればいいと思いました。なぜ、やめさせないのでしょうか。

今回の総合科学入門講座では、「政治リテラシーの獲得」という目的の講義を聞いた。私は饗場先生の「国際政治学入門」の講義の中で同じようなお話を聞いたことがあるため、今回の講義は復習として再び学びなおすことができた。

最初に、自分は「ゆでガエル」になってはいないかという指摘を受けた。「ゆでガエル」にならないためには、危機を敏感に知り、いかに果敢に行動できるかということが大切であり、そのために「政治リテラシー」が必要であると学んだ。このことを学んでから、私はできるだけ毎日新聞を読むようにしている。新聞を読む習慣をつけることで、ネットニュースやテレビだけでは理解できなかった、または知らなかった情報を整理し深く知ることができるからだ。

次に沖縄にある記念碑の碑文とアメリカ軍によるシリアの結婚式への空爆の動画と東日本震災の被害をまとめた動画を見た。とても強く印象に残ったのはシリアの結婚式への空爆の動画である。人災であるシリアへの空爆の実際の映像は、何度見ても本当にこんな悲惨なことがこの世界で起きているのかと疑問を感じてしまわずにはいられないような映像だった。また、その動画についていたナレーションにも衝撃を感じた。それはアメリカ軍の攻撃した理由と他の文化への理解のなさである。ナレーションの中で説明されていたアメリカ軍の攻撃の理由は、「砂漠から攻撃を受けた」というものであった。だが実際は結婚式の祝砲であり、攻撃ではなかった。つまり、アメリカ軍はきちんと調べることなく攻撃を仕掛けたということである。曖昧なまま攻撃をすることで多くの命が亡くなる。このようなことが数えきれないほど行われている現実をしっかりと見なくてはならない。他の文化への理解のなさというのは、動画を今回の空爆は間違っているとしてアメリカ軍を訴えた際のアメリカ軍のコメントから感じた。そのアメリカ軍のコメントとは「砂漠で結婚式などありえない」というようなものだった。「人種のサラダボウル」と呼ばれるほど多文化であると言われるアメリカであってもそのようなコメントを残す。この事実に関心を感じた。

この碑文と二つの動画をみて学んだことは、加害の主体は何か、それへの対策は何かを見失わないようにすることが大切であるということである。

次に政治について学んだ。政治とは社会における利害の調整・解決をはかるものであり、政治には価値の配分と権力が付きまとうことが分かった。また、ナチスドイツのホロコーストの動画を見ることで「強大国家権力性悪観」も学んだ。国家・政府に好き勝手させているのは大量殺人が起りかねない。そうした事態の予兆をいち早く察知し行動に移すこと

コメント [U87]: ここで書いていることも、おかしいですよ。あまり授業聞いてませんでした？

コメント [y88]: 誰がどうやって排除するのですか？

コメント [U89]: 新聞読むのは大変いいですね。その際、大きなニュースがあればなるべく複数紙、読んでください。最近各紙でだいぶ姿勢が違うので、多面的に捉えることがまず大事です。

が大切である。

最後に安倍政権のしたことの意味について学んだ。安倍政権の行ってきたことはニュースなどで報道されるものについては知っている。しかし、そのことについて知っているだけで、行ってきたことの危険さや将来の日本がどうなるかについては考えられていなかった。今回の講義をきっかけに、政治リテラシーを身につけ「ゆでガエル」にならないよう心掛ける。

今回の授業で主に政治リテラシーについて学んだ。私たち若者は普段、政治に無関心で、ゆでガエルの状態であるとあったが、私もまさにその通りの状態であった。私は日常的にネットで情報を集めており、SNS等で政治の話をしている人はたくさんいるのを知っているが、大抵は極端な思想の持ち主で、攻撃的な発言が目立つので、かかわりたくないと思っていた。知り合いの中でも政治の話をするのは過激な奴とか危ない奴だというような風があるので、むしろ話題にしないほうが正しいと思うものでもあった。しかし、年代別の投票率のグラフを見て、その若者の投票率の低さに驚いた。このような状況では政治家は若者に向けた政策を作るはずもなく、私たちは自覚もなく自らの首を絞めていっている。このまま進めばどんどん投票率が下がっていき、民主主義のシステムが十分に機能しなくなってしまい、若者が不利益を被るだけでなく、日本自体が危険な状態に陥ることになる。若者の中でも私たちのような大学で学ぶような人は特に政治リテラシーを向上させていくべきだ。

今回の総合科学入門講座においては、立憲民主主義における「政治リテラシー」についての説明が行われた。「政治リテラシー」とは、政治に対する関心、知識やそれを実行する行動力である。「政治リテラシー」を身につけることで、政治を行う上で必要不可欠な権力の濫用を防ぐことができる。そのために、強大国家権力性悪観を身につけて、賢明な有権者になる必要がある。

民主主義において悪い政府ができた時、容易に政権交代ができるとあった。確かに、理論としては容易に政権交代できるだろう。しかし、実際は今のような危機的状況であっても政党の支持率が大きく下がるということは起こっていない。私たちは今まさに、茹でガエルになろうとしているのではないか。

コメント [U90]: SNSなどにおける極論や悪口雑言にはかかわらなくていいです、まともな内容なら対応する意味ありますけど。